

# 蒲江浦の民俗

## 一、概観

染 矢 多喜男

蒲江浦は南海部郡蒲江町の中心的集落である。蒲江町へは、佐伯市より轟峠經由と畑野浦經由の二本のバス路線があるが、共に險阻な峠を越えねばならない。蒲江町に限らず、県南のリアス式海岸の集落は、長いこと陸上交通機関に恵まれず他と隔絶されていた。大正一五年の統計によれば、主要商品の出入荷先は海上交通により、大阪・広島・四国・宮崎となつていて、これがこのことをはつきり示している。

旧藩時代には、佐伯藩は九九浦の漁村を持つていたが、蒲江浦は半農半漁というよりは、主漁副農というべきである。明治三五年の蒲江村統計によれば、専業農家二一〇戸・兼業農家四六〇戸、一戸当り耕地面積は田三畝・畑三反弱である。また、主要農作物の作付面積は稲一六町二反・甘藷一二町・甘蔗一町九反であり、主要海産物は、漁獲高からみれば、鱒一四四、〇〇貫・絞り鱒三八、〇〇貫・鱈二七、〇〇貫・鰹節七、三五〇貫であり、金額では鰹節を含む節類一一、九七五円・絞り鱒一〇、八〇〇円・鱒八、六八〇円・鱈五、四〇〇円となつてゐる。

蒲江浦は背平山の西北麓に位置している。地下が本来の集落であつたと考えられ、部落の信仰的中心である王子神社は地下に、東接する熊野に東光寺がある。東光寺は臨済宗妙心寺派である。旧藩時代の大庄屋であつた御手洗家も東光寺の近くである。住家は狹隘な平地を求めてひしめき、通路も狭いことは他の漁村と同様である。

従来湾内での網漁から、湾内は真珠・ハマチの養殖、網漁は湾外へと変化したため、蒲江は九千・みりん千などの製造・加工業の中心としての役割を確立するにつれ、製造業者は空地を求めたので、集落は次第に北へ向つて伸びている現状である。

(1) 衣

仕事着 男は、手拭いのねじ鉢巻か檜のへぎで作った帽子、冬は頬冠り、厳寒中はやゝ長目のネルで頬冠りをする。六尺襦を締めるが、還暦からは赤褌を用いる。上体はボタン止めのシャツで、手首は紐でくくつた。下体は手縫いの割りばちである。冬は筒袖のドンダを着た。縞か緋を継ぎはぎして厚くなつたもので、大・小二種ある。小は膝下までの長さ、船上で作業の時に、大は足首までの長さ、作業をしない時に小の上に重ねて着る。夏は素足であるが、冬は手製の紐付きの足袋を履いた。草鞋は船では履かない。個人の船では専用の上草履を使用し、トモノマの隅におく。漁の時は藁や棕櫚の葉で作った腰袋をつけた。後に灯油をひいた三巾の前掛になつた。いか釣りの時は肘までの腕貫をした。腕貫には甲がない。雨天の時は、男女とも竹皮製のタツコロ笠を冠り、藁蓑を着た。後に布に油をひいた合羽になつた。

女は、手拭いをアネサンカブリにする。寒い時は頬冠りである。オコシに襦袢を着る。オコシは学校にあがる頃からつける。赤や桃色が多いが、中年になると薄青色をつける人もある。五〇才以上は白や鼠色である。晒やネル(冬)で作る。襦袢は男女共に還暦からは赤色にする。鉄砲袖の単衣は膝下までの長さ、冬は袷で足首までの長さである。仕事帯をコブ結びする。夏・冬ともに木綿巾の前掛をする。節製造の時は男のドンダを着る。

ふだん着 男は暑い時は襦袢・褌のままである。涼しくなると、襦袢の上に鉄砲袖のシモタカギモンかバンギを着る。へこ帯を締める。帆布やメリケン袋で作つた木綿巾の前掛をした。

外出着 男は浴衣の鉄砲袖、または袂のある着物。女はシモタカギモン、またはヨソユキを着て、伊達巻を締める。

(2) 食

常食 朝・昼はオネリ、晩は素麦飯であつた。唐芋をオロシ(切る)て乾燥させたキリポシを炊き、大きなしやもじでツツイ(突い)て粉にして練つたものをオネリ、またはネリという。オネリに水を入れ、焼いた鱒と漬物を副食にして食べた。素麦飯は、裸麦をカラウスで一度フミ(搗く)、干してからもう一度仕上げにフンで精白する。素麦を前夜炊いてしよけに打

ち上げておく。このニワリ麦を釜に入れてホンタキにする。シルヒキとして、麦一升到杯一ぱいの米を入れる。煮えたらしやもじでよくコナス（練る）。「麦飯と娘はコナスが花よ」という。不漁の年には「三三夜に餅がない。八月祭りにオネリを食べた」と言い、麦飯でさえ食べることができなかつた。

はれの食物 一寸した小祭りには、麦一升到米を二合くらいの麦飯を炊く。経済的によい家で半麦程度であつた。米飯は正月・彼岸・盆・とむらいなど稀であつたので楽しみであつた。「帯祝い」のご馳走は茶碗ウムシ、刺身・なます・吸い物・ウムシようかん・マルズンなどである。マルズンは材料があれば祭り毎に作る。特に八月一日の「八月祭り」にはなくてはならぬものだとしてゐる。魚（鯛など）を開いて塩にしておく。塩や骨を抜いて酢につける。酢を捨て、もう一度新しい酢につける。飯をかために炊いて酢をうつ。胡麻やしよがを入れてよく混ぜる。飯を握って魚をつけ、紫蘇の葉をアワセに使い、ふきんで巻いておさえ、三つくらいに切る。「帯祝い」の時は刺身・吸い物・てんぷら・まきずしに、鯛菓子（ハクセンヨウ）をつける。「年取り飯」は、鹽やしびの刺身を年取り魚とし、酢のもの・吸い物、昆布・大根・人蔘など野菜の煮メにコンコ（漬物）である。野菜の煮メをオサイとよんでいる。彼岸の「お茶日」にはマルズン・ぜんざい・豆飯を作る。四月一日のアラハナと四月四日のアラタメにはカキアイ（混ぜ飯）を作る。正・五・九月の「お薬師様」には半麦の米飯を炊きケンチャンを作る。ケンチャンは大根・人蔘・午莠・里芋・豆腐に油を入れて煮る。七月一日の「精進上げ」には小豆飯を炊き、刺身でお祝いをする。九月九日の「継子の節供」には栗を入れた芋飯を炊く。九月一日の「お伊勢講」は半麦飯にオサイ程度。一〇月一日の「金毘羅祭り」は米飯に刺身。一月一日の「霜月祭り」は米七・麦三程度の米飯を炊き、オサイを作る。

餅 正月用の餅搗きは二月二五日頃である。高山海岸に一〇町の水田があり、オモヤ株を持つ三〇〇戸は二と三畝の水田を所有していたので、餅米を作つた。二斗くらい搗いた。ニワで、夜か早朝に搗く。最初の臼でオカガミをとる。神仏用のオカガミに一斗、残りの一斗は小餅にする。餅はささげのこし餅に黒砂糖を入れた。餅入りの最初の臼でテヌクメを作る。大きな丸いかたまりの餅に餅を入れたものをテヌクメという。蓬・唐芋や芋・米・稗などの粉を餅米に搗き混ぜたザツバ餅を多く

作った。

五月の五日や二三日にはゴロシロ餅を揚ぐ。麦粉に少量の米粉と蓬を混ぜて搗いた二度うむしの餅である。サンキラの葉で包む。

キリボンをカラウスでカツ（搗い）て、水車に頼んで粉にしたものがカンクロである。「懺祝い」にはカンクロで餅やダゴを作った。カンクロ餅は豆の餡を入れればよい方で、生の唐芋を輪切りしてカンクロで包んだドシ餡が普通であつた。カンクロを練って、片手で握って小判型のをむしたり、スタキ（ゆでる）にしてしようけにうちあげる。黒砂糖を水にといて混ぜれば大変なぜいたくであつた。

スリミ 小鱈やうるめを開いて骨と皮をとり、摺り鉢に入れてれんぎでする。塩を入れるとかたまつてくる。すぐに食べる時はひらく丸めてゆでる。冬は臍に伸ばして張り、一〜二日干すと数日間は保存できた。適当な大きさに切つて使う。

### 三、漁業

#### (1) 漁場

昔は鰯が非常に多く、いるかや鰹に追われた鰯が飛び上がつて、シイデですくえるほどであつた。ウノクソヨリに行けば、七日七夜の間満船になつたことがあつたという。今の網があれば一回で満船になつたと思うという。「一〇月のジユウジユウ（最高）なぎ、親の古借銭を払う」というように、一〇月はなぎが続き、魚も餌づいてポケ網の最盛期である。この月に魚が無い年はデーナンあるいはシチリという深島沖まで出漁する。

ポケ網の網代は三つ子バエの周囲のホンゼやサカノセが中心である。その他、ナカゼ（深島と屋形島の中間）・トウノウシロ・フカセ・ハナクマ・アカサキノセ・キタノセ・セビラノシタとか、地曳網の網代の周囲にウスベー・ダケンシタなどがあつた。

地曳網の網代は、高山海岸・ガッタン（蒲江湾の奥）・シアノキ・クジラ・ウチクジラ・アカイシ・クヨム（以上小蒲江湾）マエ・コドマリ・アカバエ（以上屋形島）・ハチ・ジ・ソーノへ（以上深島）などがある。

てんぐさは、セビラノシタ・オダイシサンノシタ・ナゴヤバナ・アカバエ・トウノウシロ・アカサキ・シモノマ・ナカノマ・カミノマ・タゼカリノダマがあつた。

この中、蒲江の入口である屋形島の前のカミノマが最良であつた。

## (2) 漁撈の方法

棒受網 ニョウシとトモから、それぞれ長さ五尋くらいの孟宗竹のボケザオをオモカジに出し、その尖端から網をおろす。網の上端には桐製のアバがついている。船べりから、オーデ石というおもりをつけたオーデ網を四本さげる。網の下端はオーデ石につけてある。オーデ石は三貫くらいで、後には鉛製になつた。網を張れば、船を潮に沿うて流す。潮の流れが早いと網のぐあいが悪くなるので休む。魚群が近付くと、進行方向であるトリカジにカブシ（餌）をまいて魚群を寄せる。カブシは船の釜で煮た鱒を桶に入れてツツイ（突い）たものである。魚群がオモカジに移ると、船と網の間のなかほどにカブシのかたまりを投げて魚群を密集させる。オーデ網を引き上げ、網のなかほどの目の小さい所に魚群を集める。ボケ竿をはずして網を引き寄せ、獲れた魚を素早く船に移す。魚が入りすぎた時には網が重いので、シイデで網の魚を船へすくい込む。棒受網には一二人が乗り組む。オーデ網を引き上げるのは中堅、トモの方は船頭、中ほどからオモテよりは老令者、オモテマワリは若い者が配置される。

棒受網は川野柿治の先祖のマツジロウが紀州から習つたのが始まりである。戦時中までは蒲江の漁業の中心であり、約五〇統の網があつた。棒受網漁の良否が村民の経済に大きく響いた。漁期は旧盆から旧正にかけてである。初期には鱒やウルメ、秋から冬にかけてヒラゴ、終期にカタクチが多く獲れた。ヒラゴは鱧に似て上等である。カタクチは最近こそ評判がよいが、昔は金にならなかつた。寒くならないと鱒は餌につかない。ジャコ（小鱈のこと）が混るようになると棒受網漁の終りが近付

いたことを示した。戦後は巾着網に圧され、現在小型が二統（アベユキミツ・タケダヒロシ）残っているだけである。小型になつただけでなく、機械化して、カブシのかわりに集魚灯を使っている。

地曳網 蒲江から波当津にかけての浦々に二一統の地曳網があつた。この中、蒲江には長田・あめや・豊後屋の三統があつた。鯛が中心で、その他にキビナゴ・シビ（鮪のこと）・鱈を獲つた。明治の末までは魚が多くて浜に打ち上がるほどであつたが、日華事変頃から衰え、戦後の漁業改革によって振るわなくなつた。春はマヒラゴの子やカタクチが中心で、ハルキビナゴも獲れた。キビナゴは五月にも獲れた。キビナゴの漁が多い時は製造ができず、森崎部落に桑の肥料として売つたほどであつた。梅雨の期間は休漁する。シビや鱈は七、一〇月に獲れた。正月一〇日の一〇日エビスの時に網方が集まってバンクジを引き、網代毎に出漁する網の順序を番帳に記しておく。

網代毎に高い所にウオミがあつて魚群を見張つた。夜の魚群はシラミ、昼間はアカミという。アカミは熟練者でないと見分けが困難であつた。海面に魚がせり上がるナブラは見易かつた。魚群を発見すると、ウオミが大声でオラビ（呼び）、待機している網船に知らせる。ウオミは二本の団扇を使って網船を魚群に誘導する。左へ行けば団扇を斜左上へ上げる。マアミを右へ移動させる時は左の団扇を斜右上へ上げる。位置がよければ二本とも上にする。ドウツキ（網を入れる）の時は団扇を左右に開く。連絡事項がなければ団扇をさげたままにしておく。うまく魚群を包围すれば膝を屈伸しながら団扇を上下する。乗り子は一そうに八人でよいが、ビンモライ（魚の欲しい人）が余分に乗り込むので、セイ（人数）が多くなつて一〇人以上になる。網をおろす時はアバオキに二人、ユラオキに二人である。ユラはおもりのついた網の下部である。網を曳く時はアバは一人でよいが、ユラナオシは重いので三人は必要である。船曳網は一種の地曳網である。船曳網の時は、ユラの所から魚が逃げないように、マアミ・サカアミの間に八人乗りのナカブネを一そう入れる。乗り子がカリボウを海に打ち込んで引きあげて魚をおどす。

てんぐさ 四月一日がアラハナ（口明け）であるが、乾燥のことを考えて、荒雨天の時は順延にする。他所に出稼ぎに行つ

ていてもこの日には帰ってくる。朝七時頃、一斉に漕ぎ出す。女も出る。八時頃、リョウドガシラが立てる旗を合図に採り始める。櫛のような形のジュリンを舟で曳いて採る。ジュリンに丈夫なタナワをつける。柄の五寸くらいの所に孔があり、そこでタナワをくびり、半尋の所にティシという錘りをつける。ティシの所にヒキナワをつける。深さは八〜一二尋で、主な所は一二〜一三尋ある。一人乗りは櫓を漕ぎながらジュリンを曳く。三人乗りは二人が採って、一人がトモオシをする。てんぐさが付いている所はよいが、少ないと岩に引掛けるので重く、大変な重労働である。一〇日くらい採れば休む。盆前に二番草を採る人もあるが、一番草のように採れない。てんぐさは浜に干す。浜を持っていない人は共有の空地や畑などに干す。乾燥は何度も手を入れなければならないが、約一日でよい。天氣が良ければ半日でよい。てんぐさに付いているかきをヒセというヒセをむしる。

### (3) 漁撈の経営

網方と乗り子のデハイリ（雇傭契約）は一月一五日の霜月祭りである。祭から後はボケ網は漁に出なかった。この日にデハイリを希望する人が網方の家に集まる。アイエンキエンで契約ができた。決まれば必ず一年間はその網方の漁に出る。何処に出隊ぎに行つていても、盆過ぎから始まるボケ網には必ず帰って来るといふようにギ（義理）が堅かった。網方は乗り子に盆・正月に前貸金を渡すが、貸し方が少ないと他の有利な網方にかわり勝ちであった。デボシ（出漁）の少ない乗り子は網方の方で断る。霜月祭りにノリサガリ（前借金の未払い）があつてもデハイリはできた。この場合には、新しい網方が旧網方にノリサガリを支払う。正月二日の「乗初め」には乗り子は必ず出る。神に供えた大きな鏡餅を切った「丁銀」を乗り子に配り、魚とオサイで酒宴がある。

盆・正月にハンケ（半期）ずつの決算をするが、ボケ網は正月が主である。一二月二五〜二八日頃、サンニウアゲを網方の家でする。各人の分は網方が紙に書いて渡す。ボケ網の分配は船一・網三・ドウヨウ（雑用）一・乗り子一である。ドウヨウは薪・味噌・醤油代である。乗り子は人数倍になる。但し、見附いの年は五合、二年目は七合、三年目に一人前

となる。漁獲毎に、漁獲量を桶（二斗五升）で○桶○合○才と記し、水揚げ帳にデボシによって計算しておく。不浄を忌んだので、不幸は三日間、出産は一日フサンであってもデボシとする。ハンケの一桶当り平均価額によって計算する。各人の収入から前借金を差引くと不足の場合が多い。正月用の米・餅代などの必要な人はサンニューアゲまでに網方に前借を申込む。船から魚を大籠にすくい出す時に、イラ（鱗）で濁った水の下方に魚がシマツ（沈む）ているから、水の上方をすくっても魚は無いといつて、わざと魚を残してくれる。ヒライダシという。掃除をする若者・子供の所有になる。若者の主だった者が製造業者の所へ子供を売りに行かせる。代金は若者が分配して小遣いにする。子供達には現金でくれることもあるが、ウズマキという菓子を買ってくれることが多かった。戦後、わざとヒライダシを多く残すことが流行った。全部すくい上げてしまうような意地の悪い人は若者から憎まれて、掃除の時にわざと海水を掛けられたりした。

#### (4) 製造・加工

節 ボケ網で獲った魚は、地曳網より遠くへ出漁して鮮度が落ちるので節にする。鱒・鯖・鯉・ムロ・ウルメなどを節にしたが、鯉だけは鯉節といい、他は節と総称した。

船が浜に着くと、魚を一二貫入りの大籠に入れる。大籠の大きさは魚種によって異なる。大籠はナルを通して二人で担いで運ぶ。ナルは八尺くらいの担い棒で、一方の端を肩に入れ易いように削つてある。大籠の魚を一〇〜二〇杯のコガ（桶）に移す。鮮度を落さないために、コガには海水を入れる。海水はニナイで運ぶ。コガの魚をアゲカゴですくって丸いニカゴに入れる。アゲカゴはイラが落ちる程度の網目である。ニカゴは下に置くものは小さく、上に重ねるものほど大きい。魚を入れた四段のニカゴを沸騰している大釜に入れ、フタタギリ（約三〇分）くらい煮る。燃料がダイソクという松の割木であったから、温度が上がりにくかった。ニカゴのオ（紐）を持って二人で上げる。煮た魚はせいろに並べ、一〇枚くらい重ねて、フスベ釜でフスベル。三枚くらいずつ下から取る。五日くらい天日で干す。昔は賣台が無かったので、浜に筵をひろげて干した。浜には干し易いように砂利を敷いてある。浜は私有になっていたので、浜を持たない家は節を製造しなかった。網方と製造業者



は分離している場合がかなりあった。昔は新町の方は人家が少なく、納屋が多かった。浜は新町の人が多く所有して、地下の方には浜が無かった。雨降りには、干した魚の覆いにマツエモンという綿布を用いた。漁から浜に帰って来るのは夜の九〜一二時であったから、節の製造が終るのは午前二〜三時が普通である。大漁の時は徹夜のこともあった。節はだしによかったが、花鰹にするのは節にしない方がよかった。

魚油など 梅雨頃、豊後水道を産卵するオーバが通る。餌に付かないので、闇夜にシラミを見つけると、刺し網で取り巻き、船端を叩いて追い込んで獲った。油が多いので絞って魚油を取る。煮た魚をオシワクに入れて蓋をする。ボウズというたて木にある孔に横棒をさして、ナンバをかけて締める。タラシから魚油がたれる。締め粕は浜に延にひろげて干し、トリボシカにする。魚油は漆喰に入れたり、田の除虫用に使ったようである。煮汁は醤油の原料となった。

地曳網で獲った魚は、鰹やしびは鮮魚として売ることもあったが、唐人干し・煎子・節に製造した。キビナゴは煎子の外、正月前にゴマメ代用のスポシにした。オーバは塩に埋めてカキバにした。六月にはエンゾウ（塩物）や丸干しにはしなかった。寒い時に獲れるヒラゴは目刺しにした。寒いので甘塩でも保存はきいた。昔は金にならなかつたカタクチが現在花形になっている。

#### (5) 船など

ボケ網船 長さ五〜六尋の六挺櫓であった。船は四つのマに分けられ、ニョウシからトモにかけて、アカノマ・ドウノマ・ワキノマ・トモノマとよぶ。櫓はオモカジにニョウシから、ゴチョウ・マエ・トモ、トリカジにカイ・オーサキ・ワキがある。ゴチョウとオーサキ、マエとワキが並んでいる。トモロは船頭か船頭に代わる漁師、マエとワキは血気盛り、ゴチョウは網を曳く時は邪魔になるので漁場への往來の時だけ、カイロは方向を取るので小型で、子供か老人である。櫓で漕ぐ時は不要であるが、帆をヒク（立てる）時は舵が必要である。トモロは一名であるが、他は二名つく。ワキノマのトリカジにカマがあり、餌にするカブシを煮たり、食事のための煮炊きをする。アカマにドウケという大きな桶があり、衣類などを入れておくが、魚

が獲れると入れる。

地曳網船 五挺櫓である。三つのマに分けられ、オモテノマ・アミノマ・トモノマとよぶ。櫓はオモカジにマエ・トモ、トリカジにワキ・セガイがある。マアミ・サカアミの二そうがモヤウが、ウチロはそれぞれ外側につく。トモロは一人であるが、他の櫓は必要によって二名つくことがある。

てんぐさ採りには、専用の船やテンマ・一本釣り船なども使う。テンマは一挺櫓である。

網が麻糸の時は干さねば腐り易かった。綿糸になってからは麻よりも腐りにくく、腐りかかれはたいだ。明治末までは、宮崎県から椎皮を買って網を染めた。椎皮を石を台にして、木槌で叩いて粉にする。大釜で煮て染める。一把一〇キロで、一丈を染めるのに二把必要であつた。大正からはカッチンという化学染料を使った。網を運ぶのにはモッコを使う。

#### (6) 儀礼

船の新造 船主が木挽ぎを連れて木を伐り出しに行く。オミキを山の神にホカウ。木を伐らして下さいとお願いしてから伐る。皮を剥ぎ、適当なカイブ(厚さ)にわいて木出しをする。フナイタダシという。カワラズエの時はオミキを上げて、大工と祝い酒を飲む。カジキ・ウワダナをつけ、ニョウシとチリをつけてスイタをしく。フナオロシには親類・乗り子などを招いてご馳走をする。舟霊様は大工が入れる。舟霊様にオミキ・塩・餅をホカウ。大工の棟梁がホシの餅をトリカジに、ついでオモカジに撒く。その後で小餅とオカガミを撒く。オカガミはオモテとトモに撒く。進水の際は船を背にしてかかえ、リンガケの上をころがす。棟梁が「ヤンヤヨイ」と囃すと、全員が「ヤードートこそー」と和す。海におろす時は、全員で「ヨイシヨイシヨ」と囃す。加勢の人にオミキを振舞う。

船霊様 ボケ網船の船霊様は帆柱の元に納めてある。一对の紙雛・川柳のさいころ・ショウセン一二文である。ショウセンは墓から出たのが縁起が良いといつて、墓掘りの時に気を付ける。大工の棟梁が「オモテシアワセ、トモミアワセ、中に一二の船霊大明神」と唱えて入れる。フナオロシの時にオミキ・塩・餅をホカウ。正月二日の乗り初め、三月三日の御幸祭、八月

一〇日の蛭子祭り、一〇月一〇日の金毘羅様、大漁祝いやマンナオシの時には、オミキ・刺身・なます・ご飯などを入れた膳を子供が供えに行く。帆柱うけを固定した三角形の木を船霊様のカタというが、カタに箸で取ってホカウ。残りも供えに行つた子供が食べる。カタを踏んではいけない。船霊様は漁から帰る時などにチンチンチンとイサム。

船をタデル時には、船を洗う棒ソーラを逆にかけて、トリカジのトモからオモテに向いてウワダナを三回叩き、「船霊様船をタデルから暫らくおいて下さい」という。杉や松の枯れ葉でタデル。終れば、同じ要領で三回叩いて、「終りましたから戻って下さい。マンのイイように」という。

船霊様にお供えする時には、王子神社・八大竜王・エベス・愛宕様もお供えする。また、漁の帰りにニシンサキンハナに来た時に、王子神社などにユオバトウ（魚初穂）を捧げる。「王子大権現」、「エベス三郎」などと唱えながら、獲った魚二匹ずつを海へ投げ込む。カケノイオは二匹ずつである。

お稲荷様（狐）が河内の大師山から竜王を祀つてある山に来て鳴けば、漁の前触れで仕合せがよい。

大漁祝い 鮓・鯛が五桶以上獲れば大漁である。大漁の時は立幟を立て、船頭が「コリョウ、コリョウ」と音頭を取れば、全員が「コリョウ、コリョウ」と和して、元氣よく櫓を漕ぐ。船頭の音頭が「ハイリヤリヤ、ハイリヤリヤ」と変り、全員が和す。満船の時は「コリョウ、コリョウ」をせずに、最初から「ハイリヤリヤ」で帰る。この掛声を聞くと、家族の者は「オラビコミヨル」といつて浜に集まり、節製造の準備にかかる。網方の家で「大漁祝い」がある。獲れた魚の刺身・酢のもので飲み、ご飯と豆腐汁が出る。後片付けが済めば、おみやげとして、乗り子に大きな握り飯を一こずつくれる。子供達は寝ずに握り飯を待ち焦がれた。二〇桶以上あれば大漁祝いに準じて一杯飲もうということになる。マンナオシの時も同じようにご馳走である。

## 四、交易

物々交換 漁期には、河内・楠本など漁に出ない部落の人がテサゴをさげて魚貫いに来る。やらんと、「魚もくれん。魚をせなーい」と憎まれるので気持よくやる。子供が手掴みでわけてやる。ヤルヨウを別にしておくこともある。河内部落の人は収穫後に、牡丹餅を大きなお櫃に入れてお返しに来る。畑野浦の人は大根・ねぎ・しょうがなどの野菜と交換してくれと来る。値段は考えずに適当な量の魚をやる。漁の無い時は「上げチョクから」と無料で野菜を置いていくこともある。

仲買い 乾燥させたてんぐさは土地のナカヨセ間屋が集荷する。ナガタ・ナカダ・アカシヤ・マルセン・シラユワ・エベスヤ・オカダ・カシヤ・タケオ・マルマサ・カゲヤマ・ナガトミ・アワシヤ・マルサンなど二〇軒ほどあった。間屋は親類・交際のある人・シコミなどツキヅキの家をまわって、各戸にこずんであるてんぐさをシキノウに入れて量った。シコミとはてんぐさをあてた前借のことである。シキノウは莖を二つ折りにしたふうたいである。

出荷 てんぐさは、盆前に信州などの寒天商である大間屋を寄せ、伍長が主催して東光寺で競争入札する。大間屋は人夫を備って俵にする。一俵は一八貫である。一一〇〇俵・二万貫くらいとれていた。その頃一〇貫が二九円であった。

節は煙草の空箱（木箱）に詰めて出荷した。一六貫入りであった。電報を打てば間屋が買いに来た。共同出荷はヨダンでうまく行かなかつた。製造業者と問屋との系統が強かつたのと、品質の上下を込みにしたマクリザンニョウでは困ることができたためである。

トリボシカは一六貫ずつタテカマスにした。莖を切って口蓋にし、七か所を竹針で桔梗取りに口締めした。問屋が買いに来て尾道方面に出荷した。大正二〇年頃まで、大阪商船の宮崎丸・大分丸が定期船として就航し、節やてんぐさを積んでいた。

大正一五年の統計によれば、薪（宇和島）・まゆ（延岡）・豚（阪神）などの農林産物は別であるが、水産物であるてんぐさ・目刺し、キビナゴ煎子と木炭は出荷先が大阪となっている。他方、入荷では米・塩・莖（宮崎県）、酒（広島）・小麦粉（門司）・足袋（大阪）で麦・醬油・焼酎・切干しは四国である。

市 正月の八日薬師には、県内から露店商が集まり、寺の前から往還・道路に市が立った。鉦・鎌・玩具・菓子などの露天が並んで盛況であった。三月の御幸祭の時も露天が出る。八日薬師の時の三分の一くらいという。肉桂・肉桂酒・鉛玉・棒鉛などを売る。

その他 正月買物に佐伯に出るほど経済的余裕のある人は少なかった。正月を迎えるに必要な米・餅米などは、乗り子の申込みを網方がまとめて購入して貸す。盆・正月に貸借の決算をする。盆は一四日、正月は大晦日が貸しの取立てで忙しかった。しかし、盆の一五日と正月の一日には、貸金の取立てに行っただけで済んだ。医者の薬代は、盆は一三日、正月は一二月二八日頃、主人が支払いに行く。医者が一杯出していた。

## 五、社会生活

村の構成・機能 地下・熊野・山後・中村・長津留の五部落であったが、大正末に新町が長津留から分離し、戦後に地下が東西にわかれた。現在は地下東・地下西・熊野・山後・中村・長津留・新町・鷺谷の八区からなっている。区は数この一〇人組にわかれている。一〇人組には月当番があり、区長からの触れごとや王子神社のキョウシャワリ（祭典費）や東光寺の本山金の徴収をする。月当番から区長へ、区長は宮総代や寺総代へ渡す。

昭和の初めまでは区長を伍長といい、触れごととはコバシリという若者が通りの所々に立って、「明日限りジョウノウ（税金）持って来ヤシャリー」などとオランでいた。今の月当番は一〇人組といい、月単位に一〇人組の家が交代で勤めていた。

区のヨリは伍長の家で小正月頃開かれた。口のきくエレインが決めてくれるからといって、ヘーメーヤ（一般住民）は殆んど出なかった。決算・行事計画や伍長・ワケーモンガシラなどを決めた。区費は一定額を徴集することではなく、必要に応じて一〇人組が集めた。ナカマシゴトとしては共有地の植林や伐採・道路普請・大垣さらえ・イデさらえ・祭典の諸役、臨時に学校の敷地造りなどがあつた。共有地は山林と土地があつたが、その後個人へ売却した。大垣は猪垣で、小学校の裏から高山ま

で約一里の間、尾を登り谷を下って続いている。高さ二米の石垣の外側に溝を掘ったものである。大垣さらえは農家のみであったが、半農・半漁であったから数は多かった。イデさらえは水田所有者であった。寺や神社の祭りの準備は組を割当てる。

御幸の役は一〇人組がくじできめる。昔はあたりますようにと祈った。「正月一月盆三日祭一日情無や」というように、正月は休みが多いので、ナカマシゴトに出ることが多い。正月の外、盆・祭りなどやカギョウドメで漁をしない時にヨリをしたり、ナカマシゴトをする。ナカマシゴトに出ない時は日当に相当する金額を徴集したが、女子供でも出ればよかった。出ない人があれば「アンヤター（あの人）出るコターデラジ、言うコター一人前」だと言っけなした。

漁業関係では、網方がマワリモチにリョウドガシラをつとめた。任期一年で、漁業関係の規則であるハマホウを制定したり、リョウマツリやカギョウドメ、あるいはアラハナなどの決定をした。

若者組 小学校をアガル（卒業する）とワケーモン組に入る。ワケーモン組には、ワケーモンガシラと役員がいた。ワケーモンガシラは二五〇才の妻帯者である。区のヨリで選ばれ、若者を統制して伍長を補佐する。役員は数名で二〇才前後の者がなる。ワケーモン組は消防・夜回り・共有山の植林・八日薬師の灯籠引き・オタミセ作り・神輿担ぎ・盆踊の樽作りなどが主な仕事である。神輿担ぎは徴兵の者や一九の厄年の者が志願した。王子神社の祭りなどに、芝居をしたり請けたこともあった。

正月一五日のワカドリ祝いからヤドをとる。気の合った者同志数名が、心易い広い家に頼んでヤドを貸してもらう。ヤドのオヤジはオクノマに引越して、イノマやオモチなどのエエ（良い）部屋を貸してくれた。蒲団は各自が持ち寄る。夜はヤドに集まって将棋をさしたり、漁やオナゴの噂など世間話をした。雨降りの時は草履作りなどもした。盆・正月にハンケ分のお礼に一円くらい贈る。年に何回かヤドの肥料運びを手伝った。結婚すればヤドに泊らなくなる。オナゴもオナゴシヤドをとった。

正月八日の八日様が済むと灯籠祝いをする。新入りした者達が打上げの材料として、正月の残りの野菜を買い集めてまわる。ワカドリ祝いの時は、魚を獲ったり、鯛を貰ってご馳走を作り、ヤドの人や若者仲間、親しくしているオナゴを招く。芸者を

あげることもあった。飲んだ後はヤドに雑魚寝である。一六日は鰻入りで、オナゴシヤドに招かれた。正月のご馳走がなくなった頃、ヤドがすしやぜんざいなどを作って、お返しに招待してくれる。祝言の時にはヤドのオヤジやオカミを招く。結婚後の初正月には焼酎・砂糖箱・石けんなどを持って挨拶に行く。その後も、盆・正月などの外、吉凶があれば、招待したり物を持って挨拶に行く。

講 信仰的な講としては、尺間・宇納間・稲荷・大師・薬師・庚申・金毘羅・黒住・和霊講などがある。庚申は衰えている。金毘羅には漁がない時に、マンナオンに船頭が代表で参っていた。和霊様には、新造船を作った時に、盆前に乗り子全員が樽を漕いで参る。アラセがよければ帆走する。宇納間は火除け地蔵である。

家の階層 部落の草分けは七軒株として知られている。川野（三戸）・佐野・山野・米田・山本である。以上の中、他へ転出した一戸を除いた六戸は王子神社の境内に祖霊を祀っている外は特に特権を持っていないようである。旧大庄屋の御手洗家については、屋形島の鰻島神社の祭りには御手洗家が行かぬと扉が開かぬという。

二合五勺のオモヤ株を持っているのが三〇〇戸くらいという。二―三畝の田とカクラとよぶ段々畑を一反くらい所有している。二合五勺は四分の一であるから、旧藩時代の百姓株の四分の一を意味するのであろうか。二合五勺の株を持っているかどうかを、結婚に際して選考の基準にしている。カクラの境界には且竹や棕欄が立っている。

## 六、民俗知識

しつけ ポケ網では、出漁に際して、見習いの若者は一時間くらい早く集まり、飲料水・味噌・薪などを、網方の所から船へ運んで準備を整える。船では、船頭はトモノマ、老人達はワキノマ、中堅者がドウノマ、若い者はアカマに集まっている。帆をヒイ（立てる）ても風が弱い時などに添え櫓をタテルが、添え櫓につくのは若い者である。また、カブシを煮たり、炊事やワンマ（丼）の洗いや片付けも若者の仕事である。食事の際に、まず船頭によい魚をつぎ、以下は年令順につぐ。漁から帰れ

ば、老人達は帰宅するが、若者は魚を浜へあげたり、船掃除をする。船の掃除はエナゴ（柄杓）で海水をかけ、ソウラという棕櫚皮のたちくず（縄にならない固い三角形の部分）を、長さ一尋の竹の柄の尖端に結えたものでこすって洗う。雨水が船に溜った時に雨水を汲み出して海水をかけて洗うのも若者の仕事である。雨水は船をいためる。一か月に一回行なう船タデにも老人は出ない。大漁祝いに一杯飲む時には、刺身や酢のものを作るのは老人であるが、大人が車座になって飲む間、照明のための提灯持ちや後片付けは若い者の役である。以上のように、年令相応の仕事を担当し、老人達はその経験を生かし、青・壮年者が力仕事を、若い者が雑用をするといった役割はかなり明確である。

気象、風の名称には、コチ（東）・ニシ（西）・ミナミ（南）・マジ（南西）・キタ（北）・ワイタ（東北）などがある。

マジは天気の変り目に吹く。良くなることもあれば、悪くなることもある。ミナミが強ければオオミナミという。台風である。天気に関する言葉には次のようなものがある。

「朝ゴチタマジ日和の開山」 二月の末についていう。好天が続く。

「二八月は手のひらがえし」 二月と八月は天候が急変し易い。

「春一番の麦倒し」 麦の熟れる頃（旧三月二〇日頃から麦を刈る）にミナミが吹く。

「彼岸坊主の大糞流し」 彼岸の頃に大雨が降る。

「二三夜降らねば曇る」 二三夜は天気がよくない。

「梅雨のうちは逢の根に船をつなげ」 梅雨の間にはあまり強い風は吹かない。

「六月サダテ馬の背を降り分ける」 少し離れると降らぬ所がある。

「八月タダレ梅雨のうちを笑う」 八月には梅雨のような長雨がある。

「シブキタ六分雨」 九月頃の北風は六割は雨になる。

「キタゴチャ雨ジャ、屁は風ジャ」 キタゴチの雨はたいして雨量は多くない。



## 七、童戯・娯楽・遊戯

童戯男児は竹馬・キチ（独楽）回し・ネンガラ・タタカイ（戦争ごっこ）・タコ上げをした。独楽は平独楽はなく、ギボ（擬玉）のついたものと、ウチワリ用の鉄釘のついたものとあった。独楽が動揺せずには回ることをネイルという。ネンガラは煙や樺の枝の尖端をとがらしたもので、地面の柔らかい所に打ち込んだものを倒して取る遊びである。工夫してヨゴード（曲った）ものをこしらえた。タタカイは陣地を作って、棒で叩き合った。凧は菱形のものである。四角で紙をつけてウドマ（唸ら）せるものをブンブンという。共に手製である。奴凧は店に売っていたが、減多に買わなかった。

女児はてまり・サイギョウ（お手玉）・はじきをした。てまりの遊び方には、次の者に渡す時に大きくつき、「ヘシラン」といい、次の者がつけなければ負けというのがあった。サイギョウには砂・豆やシマという小さな貝殻を入れた。二／＼ここで遊ぶ。ホリダシといって、サイギョウを取りながら、土に埋めた貝殻を掘り出す遊び方もした。数多く貝殻を掘り出した者が勝ちである。はじきには貝殻を使った。てまりやサイギョウには唄があったが記憶していない。羽根突きはしなかった。

男女ともに遊んだのはノシロ・ままごと・石蹴り・かくれんぼ。いちごやサド（いたどり）取りに行ったり、椎の実やどんぐり拾いがあった。ノシロは冬に海岸へ行き、打ったかきやさいの目に切った芋を空きかんや貝殻・鍋で煮て食べる遊びである。

露天歌舞伎 盆・正月には軒築方面から歌舞伎が来た。土地の人が請元になり、木戸銭をとって興行した。露天歌舞伎とよんだ。浜に筵やこもでシバガキを結び、筵敷を作った。照明はランプやガス灯であった。地狂言をする部落もあった。

アナイチ 正月には女達がアナイチに興じた。一〇人くらいがショウセンを三／＼五文宛出し合って、一間ほどの所にまき、順番にオヤセンで打って、あたれば取る遊びであった。

## 八、人の一生

### (1) 出産

帯祝い 五か月目の大安など吉日を選んで「帯祝い」をした。現在は戌の日にしている。夫婦のオバとトリアゲバーサンを招いてご馳走をする。トリアゲバーサンはコモチバーサンともいい、盲のオタネ婆という人が居た。嫁のオバが帯を贈る。

出産 陣痛が始まれば産婦は実家に帰る。オクノマに布を敷き、前に横んだ蒲団にもたれてうつむきに生む。明治末に渋紙を敷くようになった。トリアゲバーサンが綿糸でクビリ、裁ち缺でへその緒を切った。バーサンが口に焼酎を含んで赤子の目とへそに吹きかけた。行水たらいで産湯をつかわせる。アトザンはどびんに入れてオクノマの床下に埋める。一週間は母親の腰巻に赤子をくるんでいた。その後は晒やネルのウブキンを着せる。兄姉のがあればお古を着せた。

## (2) 生児儀礼

名付け祝い ヒチャともいう。母親は三週間は実家に居るので、夫方の手の空いている女が赤子を連れに来る。夫か夫の親が命名し、「命名 ○○」と白紙に書いて床の間に貼る。白飯を炊き、帯祝いの時と同じようなご馳走をする。オバが招かれる。嫁の里がウブキンを贈ることもある。親類はたいいて二週間以内にお祝いを贈る。

宮参り 男児二日目、女児三日目に「宮参り」をする。赤子にモスの筒袖の着物を着せて、オバが抱いて参る。冬であれば袖無しも着せる。かんびんに入れたオミキとろうそく二本を持って行く。ろうそくを立て、オミキとさい銭をホカウ。拍手を三つ打ち、「一代この子のサカシイように」とお願いする。拜む時に赤子を拜殿にオーノキ（仰向き）に寝せるので、赤子はたいいて泣く。神様が赤子の尻をひねったので赤子が泣き、尻に青いあざができているという。無理に泣かせることはない。神社には神主もミヤボウ（宮守り）も居なかつたのでお祓いはうけない。小豆飯を炊いて、宮参りに行ってくれたオバに贈る。

宮参りの時にはサンゴニンのヒは晴れていないが、いつ晴れるかははっきりしない。サンゴニンには、昔は鱈のカキバを食べさせた。悪血をくだすという。今は白身の魚を食べさせる。消化の悪いものやねぎは食べさせない。

百日 モモカはクイズメである。小豆飯を炊く。赤子の口に二〜三粒入れてやる。家内だけで祝う。

初節供 女兒の初節供は殆んど祝わなかった。男児の初節供には、嫁の里が武者戯りを一對、オジ・オバなどの親類が鯉戯りを贈ってくれる。家の前のツボウチに立てる。五月節供の前後の大安などを選んで「職祝い」の招客をする。嫁の里には、節供の人形餅（ちまき）一組を重箱に入れ、高膳にのせて贈る。

初誕生 嫁の里から、女兒には友禪模様様の振袖、男児には三枚重ねの紋付きの振袖を贈ってくる。オジ・オバなどの親類は金でお祝いをする。餅について、お祝いをくれた親類・近所などに、五―一三この奇数を重箱に入れて配る。オウツリは燗寸・米・豆・子供の下駄などである。一臼で二この一升餅を一重ね作り、箕に入れて紙の上に置き、トリアゲパーサンが赤子を抱いて踏ませる。この時に「お前ゃ百までわしゃ九九まで、共に白髪が生えるまで。千年万年サカシイように」という。赤子に真石をなめさせる。餅を切って、お祝いの膳につける。ご馳走は初節供に同じであるが、外にモリダシをつける。ようかん二切れ・高野豆腐・椎茸・オシキリ（昆布の切ったもの）を平たい皿に出す。モリダシは持って帰る。

育児 赤子が夜泣きをする時は連れて地藏さんに参ったり、にわたりの絵を描いて枕許や天井に貼る。母乳が不足する時はノリに砂糖を入れ、乳首をつけた乳びんで飲ませる。ノリは麦飯ができる前にみそこしを入れ、杓子ですくった汁である。ヘコ祝い 男児が一一才になれば、「ヘコ祝い」に、オジ・オバが六尺ふんどしを贈る。ボケ網に出れるようになり、三合の分配を受ける。

ワケイモン組 社会生活参照

### (3) 婚礼

結婚 部落内婚が主で、従兄妹結婚が多い。若者時代に親しく交際した相手とは、関係ができていたとしても結婚するとは限らない。相手の家柄や経済状態を考えて親が決める。娘の方も両親健在の家の長男を選んだ。二合五勺の耕地を所有していることが条件であった。

シタギキ 適当な娘があれば、娘の女友達にシタギキする。友達が本人にシタバナシをする。

クチキキ 可能性があれば、オジ・オバが娘の家に素手でクチキキに行く。八合までになっている。行くのは夜であるが、他家を訪れる時に提灯を持って行くのが礼儀であるので、必ず提灯を持って行く。「提灯持ち」は仲人を意味する。

モライウケ カタメとして一升持ってモライウケに行く。荒神様にオミキを立てて下さいと挨拶するのでコウジンオミキという。

サカヅキ 角樽・カケノイオと酒肴を持ってサカヅキに行く。角樽には七合五勺入れる。カケノイオは鯛二匹、酒は普通三升、肴はぶりである。サカヅキが今の結納に当る。結納という言葉は知らなかったという。結納に帯の一筋もやった家は二軒程度である。「角樽が来たからいろいろ言われん」と言った。この時に祝言の日取うを決めることもある。無理に決めなくてもおいおい決まる。

ヒッコシ シキイゴシともいう。娘を男のオジ・オバが連れに来る。娘とそのオジ・オバ・兄・姉がついて行く。一杯出る。娘は帰ることもあるが、帰らずにそのまま男の家に同居し、肉体関係もできる。昔はデハイリ(離婚)が多かった。交際期間がなかったし、他に恋人があったり、親の一方的意見を押しつけたためである。特にシュウト(姪)が難しい場合に多かった。

祝言 ヒッコシのままて祝言をしないこともかなりあった。祝言はヒッコシから半年以内が普通で、正月か三月が多かった。この時にはおながが太っていることもかなりあった。祝言の当日の午後四時頃、手伝いが荷物を取りに行く。コウヤという大風呂敷に伊予がすりの蒲団を包んだ程度の荷物である。長持を持って来たのは二〜三軒くらいである。

午後五時頃、貰い方のオジ・オバ二組が提灯をつけて嫁女連れに行く。カドデの膳につく。遣り方のオジ・オバ・兄弟などの近親が出る。ゆっくり別れを惜しもうとするので、出発をセカス(急がせる)。花嫁はマルアゲ(丸髻)・紋付きで仏壇に参り、両親に別れの挨拶をする。親は家に戻るようなことになるなど訓える。縁から出る。花嫁のオジ・オバ二組がついて行く。直接貰い方の家に行く。縁から上り、オモテ座敷の床柱の前に導かれる。婿は嫁の右側に坐る。ソウヨメジヨ(添い嫁女

・ソウムコが嫁と婿の両側に坐る。ソウヨメジヨは島田醬で、嫁より少しおちる同じ服装である。嫁方と婿方はそれぞれ嫁と婿の側に向い合つて坐る。婿のオジが三々九度の盃をさす。謡いはない。

続いて祝い（披露宴）になる。ホンキヤクの上座にはオジ・オバが坐る。双方の兄弟や親類は出席順に適宜の空いた所に坐る。婿の両親は挨拶に出て接待はするが、膳にはなおらない。猪串部落では、若者が縁に大きな石を置く。尻の坐るようになるという祝いである。蒲江ではそういうことはしない。ホンキヤクに続いて、招待した友人達の祝いがあるので夜明かしである。他部落から来た客が帰る時にはワラジザケを持たせる。

ナオン 翌日は嫁の両親・遠い親類・近所の人を招く。ナオンという。お祝いの金額の多かつた人はもう一度招く。ヒキモノをつけない簡単な膳部である。

イタジキバライ 三日目に洗い片付けし、手伝い人にばらずし・吸物を出す。イタジキバライという。里帰り 一週間以内に、新夫婦が「里帰り」をする。泊らない。ソウヨメ・ソウムコがついて行く。先方の仕度の都合があるので、事前に酒一升と鐏を届けておく。

樽入れ 一〇日以内に、婿の友人が祝い酒を持って来る。「樽入れ」という。

初正月 歳暮として焼酎一升・反物一反を嫁の里に贈る。大年の晩に年取りの膳を嫁が親許に持つて行く。すりみ・なます・吸物や蓋のある赤塗りのカシ碗に入れたオサイを高膳にのせて行く。

#### (4) 年祝い

厄祝い 男は四二・六一才、女は一九・三三才が厄年である。「厄祝い」をする。四二才の男は正月の間に餅を搗いて年を取りなおす。招客はしない。王子神社の祭りに神楽を奉納し、網伐りの晒をあげる人もある。今は神社参りをする。四三才を「晴れた」という。六一才の時には赤襦袢を贈られる。女三三才の厄に近親が帯を贈る。

## (5) 死・喪

呼び戻し 赤子を生みそこねて産婦が死んだ時は屋根をはぎ、その名を呼んで「呼び戻し」をした。

枕直し 死者が出ると、神棚・荒神様に扇子を開いて立てる。死者をオモチ座敷に移し、筵の上に蒲団を敷く。枕許に魔除けの刃物を置き、箒を立てる。エエ(良)着物を逆さにかける。六枚屏風をたてまわす。仏様の掛軸を屏風の前に、その前に経机を置き、一本花・線香一本・二本箸を立てた山盛りの茶碗飯と小皿に盛ったキダングを供える。飯は手のひら一杯の米をとがないままカラナベで炊く。米を先に入れてから水を入れることをカラナベという。キダングは一台の米を洗わないですった粉で作った丸団子である。お寺をよんで枕経をあげる。

イケホリ 無常組はないが、病状悪化の頃から人が集まっているので、親類や近所の人が葬式の準備や使いをしてくれる。近親の若者がオミキを持ってイケホリに行く。酒をたらして地神様にホコウ。オミキをいただいてから掘る。杖・花傘・幡・シンテイ・歛型などを作る。杖はスグワという木に黒・白の紙を巻き、腕型の笠・藁草履・方一尺の布を結びつける。藁草履は葬式後に杖を担いだ子供が貰う。あかぎれに効くという。布は目を思わないという。花傘は竹の先を割ったヒゴを組み合せたらす。ヒゴに色紙をひねって貼りつける。幡の上部に竹で作った竜をつける。スグワの葉で耳、枝で角、紙を丸めた目、赤紙の舌をつける。輿の四隅に燕をつける。棕櫚の枝で作り、墨で目などを書く。紙幡の字は寺が書いてくれる。シカバナも作る。歛型はシンテイに入れる。和尚が引導を渡す時に投げる。火葬になってからは藁束にかわった。藁束は埋葬の時に埋める。親類に知らせるヨビツカイは必ず二人一組で行く。寺に行く人は握り飯七こを盆にのせて行き、寺の地藏に供えてから和尚を迎える。太鼓二・チャンガラ二の入っている挟み箱を担いで帰る。

夜伽 徹夜で「夜伽」をする。眠らないために酒・菓子を出す。

湯灌 雨戸をしめ、オモチの畳を上げてする。近親者は裸になり、左縄の輪をかける。水をたらいに入れてから湯でぬるめ。頭からたらいのぬるま湯を逆柄杓でかける。近親者が剃刀で一剃りずつ頭髪を逆剃りする。湯灌の間はろうそくを灯し、

線香ををたいて観音経を読む。

納棺 湯灌が終れば、頭に卍を巻き、禪(男)・オコシ(女)と経帷子を着せ、腕貫・脚絆・足袋を履かせる。卍は白紙を三角に折って卍を書いたものである。経帷子は三尺着物で、晒を缺で裁ち、年寄が皆で縫う。ボンサン(糸止め)をしない。タマシヌケといって、襟から下を三寸ほど縫わずにあける。サンヤ(頭陀)袋には十二文・珠数・櫛・針・糸・五穀(米・麦・豆・粟・スモウトリ)を入れる。スモウトリというのは牌である。牌は根が張っていてこぐのに力があるからスモウトリという。棺は四角の立棺である。膝を曲げて入れる。正面には前と書いておく。新聞で巻いた藁を詰め、生前好きであったとか愛用していたものを入れる。別れの対面が済むと蓋を釘でとめる。最初に長男、続いて近親順に打ち、最後に長男がとめる。

内葬式 オモテ座敷の正面に安置した輿の中に棺を入れ、供物を飾る。家型のシンテイを輿の横に置き、中に位牌を入れる。僧が読経をする。「別れの杯」をまず和尚が飲んで近親者にまわす。導きの読経がある。

葬列 輿は縁から出る。門火を焚き、茶碗を割る。葬列の順序は、挟み箱・花傘と幡・和尚・花・ウチオイ・お茶・串団子シンテイ・杖・善の綱・輿・会葬者である。ウチオイは高膳にのせる。串団子は一〇この丸団子をさした一二本の串を木の台にさす。造花をさし、金紙で棹をとり、赤い布を蝶々に結んで垂らす。一組はお寺での葬式後子供に配る。一組は持ち帰る。シンテイは竹を二本通して子供二人が担ぐ。杖を担ぐのは直系の子供である。善の綱は一反で、杖から輿に結んである。近親の女達がキチヌウ(忌中)髪を結び、白の帷子をかぶって綱の両側につく。輿の前方は次男、後方が長男、両側に近親者がつく。紋付きを着るが袴ははかない。裸足である。輿の柄に結んだモチカタという六尺の晒を首に掛ける。両側の人は首に掛けて前に垂らすだけである。式後に形見として貰い、禪にする。輿には天蓋をさしかける。和尚が来た道を通って寺へ行く。寺の門に入ってから三回左回りをする。

葬式 寺で葬式をする。祭壇を作り、供物を飾る。和尚が引導を渡してから焼香をする。遺族代表が挨拶をして参列者は解散する。

埋葬 墓地は寺の近くの山にある。土葬である。伝染病で死んだ人は高山海岸のホソゴという浜で火葬にした。埋葬の時は小僧が読経する。棺を埋める時は穴をまたごえてはいけない。四隅に構えて穴に入れる。長男から近親順に一畝ずつ土をかける。ならしはテンデ（思い思い）にする。上にシンテイを置き、杖を立てかける。中には白い布袋をかぶせた位はいを入れる。水を茶碗に入れて供える。近親者は行った道を必ず帰る。帰宅すれば塩を手渡しに貰って手を清める。

取上げ 葬式の日の晩に、近親者と懇意な人で「取上げ」をする。葬式の通知に、葬式後自宅において粗茶を差し上げると書いてあれば一人だけ、ご家内中とあれば二人以上出席する。胡麻豆腐やしらあえの精進料理である。この時に、重箱に飯を山盛りにし、家によっては油揚げを添えて、親類・近所・懇意先などに配る。取上げに招待した家にも配る。家によっては米五〜六俵を平釜で炊いたほどだという。葬式には米が多く必要なので、死者の子は米一俵あげるのがしきたりである。

墓直し 翌日、枕石・卒塔婆・砂を持って「墓直し」に行く。僧が読経する。穴を掘ったため墓地が荒れているので、新しい砂を置いてならず。枕石は楕円形の枕によい形の石を拾う。足で蹴ったら他の石にかえられない。石には○に空和尚が書く。帰ってから「精進上げ」をする。魚を使う。

四九日 七日目毎に、お寺がお経をあげに来て卒塔婆を書いてくれる。卒塔婆は四九日まで墓に七本立てる。後のものは短く小さくなる。果物とオサイ（油揚げ・ふ・かんぴょう・椎茸）に団子一重ね（一一こ）を丸盆に入れて持って行く。寺では容器に盛りなおしてお経の時に供える。同じものを家の位はいにも供える。

四九日には近親者を招く。餅を搗く。大きな餅を一重ねと四九の餅を寺に持って行く。四九日の餅の音を聞くまでは、死人の魂がヤ（家）の棟に止まっているから、改築や家移りをしてはいけないという。四九日まで、墓地のカンテラにアカリトボンに毎晩行く。昔はトウジミ（灯芯）を使う巢箱状の墓灯籠であった。死人の着物は洗って北向きに干す。乾けば適当に仕末する。

百か日は小僧がお経をあげにくる。



年忌 ムカワリ（一周忌）には、近親者が集まって盛大に法事をする。三・七・一三・一七・二五・三三・五〇年に法事をする。「親の五〇年をする人は不幸な人だ」という。五〇年忌を済ませれば位はいを捨ててもよいという。昔は百年忌をした記録が東光寺に残っているという。

## 九、年中行事

### 1 正月

煤ハキ 二月二三日に、神仏を出して煤ハキをした。オミキをあげ、カキアイを炊く。今は二五日頃である。

大年の晩 オモテの戸口に松竹梅を立てる家は少なかった。神棚に松竹梅をあげ、仏壇には大きい花筒にシキビ（柘）を供える。ボケ網船はサガトウという帆柱うけに、松竹梅をつけた注連飾りをする。縄をなつてヒ（幣）を下げた家もあった。

オカガミは、床の間に天照大神への一白カガミを中心に、エベス・宮地嶽・金毘羅様などに八重ね、仏壇には先祖の位はいの一人ずつに四重ねくらいを供える。舟霊様にも供える。オカガミは、半紙を二枚重ね、裏白とツルノハ（譲葉）を、その上にオカガミを置いて上に燈をのせる。カケノイオとして鯛か鰻を二匹薬スポに通して神棚に供える。

年取り飯は午後二時頃食べる。白飯に年取り魚として鰹やしびの刺身・酢のもの・吸物・煮メ・コンコ（漬物）を高膳で食べる。白飯は元日の朝まで食べる。

貸借関係の整理に夜通しまわる。銭のない人は居留守をつかったりした。夜は炬端で餅を食べる程度である。

神社や墓に参る。トシマイリという。尺間に参る人もあった。神社ではヒトグラミ（灯りがつく頃）からトシゴモリして通夜をする。正月一日 朝四〜五時頃王子神社に参る。神主からオミキをいただく。朝食は年取り飯の残りとお雑煮である。雑煮は醤油汁で、フンダン草、ネブカ・餅を入れる。昼食は温いご飯である。元日は火の気を焚かぬようにという。雨戸をあげず、掃除もしないことになっている。親・兄弟や仕事関係の家に、主人がお歳暮を持って「年始歩き」に行く。一日に行けない家には正月中に行く。親・兄弟の所へは酒、その他にはシャツ・手拭いである。「結構な春になりました」と挨拶をする。年始客に

は煮メ・数の子・チンカライリ（ごまめ）・酢の物をヒロボンに入れて出す。

正月二日 朝、「若風呂」に入る。初買物に店に行くと、何か祝いの品をくれる。ポケ網船などは「乗り初め」をする。船名のタテノボリを立て、主立った人が乗って漕ぎまわり、船でオミキアゲをする。

正月三日 特別な行事はない。自由に遊ぶ。

正月四日 テハジメといつて、仕事が始まる。

正月六日 「六日年」という。地下の一〇人組では火災除けの行事をする。昔、正月六日に大火があったが、地下だけが免れたという。神主を招いてご祈禱をあげる。家を新築した人は自分の家でもらう。

正月七日 東光寺の「八日薬師」の縁日が始まる。寺がお札・回向袋・切り餅・しゃもじを全戸に配る。顔役には大きなお札、網方には船にくくりつける木札である。お札には「奉転読大般若経六百軸懇祈願所」と刷つてある。回向袋には米・麦・豆などを五合くらい入れて、七日の晩に参つて薬師堂に供える。お願のある人は禪・オコシ一枚になつて裸参りする。庫裡の前に置いてある水桶の水を柄杓に汲んで、薬師堂の前でジョウモンを唱えながらホカウ。ミズノハナという。お願いの人の年の数の回数を繰り返す。この夜は五部落の若者達が「灯笼引き」をする。予め干潮の時に灯笼柱五本を港に立てる。昔は遠浅のドブであった。柱のナンバ（滑車）に網を通し、寺の前から網に灯笼を下げ、セングリに網を引き、一本の柱に五〇こくらの灯笼を並べた。網を引く時に灯笼の火が消えると、子供達が「〇〇のがブエタ（消えた）」と囃し立てた。

正月八日 この日は他町村の親類・知人を招待する。参詣人は何万という数に上つて、市が立った。地曳網の船が一カケ（二ぞう）ずつ化粧（飾りつけ）して、ウチロ・ソトロに思い思いの衣裳を着せ、笛・太鼓の鳴り物入りで、ジョウヤラ踊りをしながら湾内をまわった。約二〇統集まった。

正月一〇日 現在の農協利用部の位置にエベス様が祀つてあった。「一〇日エベス」には、エベス様でお神楽を奉納した。網方が集まって、オミキのカガミを割り、漁師に振舞つた。

正月一日 「帳祝い」をする。床の間に新しい帳面を供え、高膳にぜんざい・オミキ・カケノイオをホカウ。帳面の汚れるようにとぜんざいを作るといふ。

正月二日 「二薬師」で、大般若経の読経が薬師堂である。八日薬師に参り洩れの人が参る。二度目に参る人もある。露店商はこの日まで泊っていて店を開く。

正月四日 「一四日正月」といふ。カギョウドメである。ナカマシゴトがあつたりする。

正月五日 「一五日正月」といふ。カギョウドメである。自由に遊び、芝居などを見る。

正月六日 「魚鱗供養」がある。東光寺の魚鱗塔（江海魚鱗離得苦楽塔）にリョウドガシラや網方が参つて一杯飲む。魚の供養にお経を上げる。

正月二〇日 「二〇日正月骨叩き」といふ。餅も何も無くなつてしまふ。芝居は此の頃までである。

(2) 春から夏

初午 東光寺に稲荷様が祀つてある。四〇〜五〇人が稲荷講を組織している。お祓いをあげて簡単な膳部でオミキアゲをする。節分 家々で豆撒きをする。家の中で「鬼は外」と、大きな声で三回叫び、戸外に出て「福は内」と小さな声で三回言う。

撒いた豆を拾うのが子供の楽しみであつた。

彼岸 お寺で「彼岸供養」があるので、トキ米二合半〜五合あげる。寺僧が彼岸の間に全壇家を読経してまわる。「寺祝い」に彼岸団子を持って行くと、寺にある位牌に供えてくれる。彼岸団子は米の粉で、彼岸の入り・中日・晴れの三回作る。人を賞めたりけなしたりすると、「彼岸団子で上げたり下げたり」といふ。

彼岸間に命日がかかる家は「お茶日」をする。「〇〇が彼岸にかかったからお茶を入れます。茶飲みに来て下さい」と、親類や近所を招く。すし・ぜんざい・豆飯を作る。

二月三日 「三夜」で餅を搗く。おなますをしてオミキを立てる。不漁の年には、「三夜にお餅が無い。八月祭りに

オネリを食べた」というように、この日に餅を掲げなかった。

二月二四日 愛宕様の祭りである。

三月三日 王子神社の御幸祭である。昔は六月であったが、暑いので早めて三月にしたという。神興三体（王子・愛宕・姪子）は神社から往還に出て、今の役場前が出る。港にボケ網船を並べて作った船橋を渡り、ニシンサキの鉄工所付近のオタミセ（お旅所）までオハマイデする。船橋はボケ網船全部（約五〇そう）が出て数が多いので半円形になる。くじを引いて一・二・三番と並べる順序を決める。一番手前と最後はネブネという。網船はトモの帆柱うけであるサガトウに立織りを立てる。ニョウシンの銅に緑青を塗って化粧をする。イサキの皮を割いて水に晒し、椎皮で染めた繊維か棕櫚皮を布で包んだ首輪の所から、フマエという丸太を一本ずつ両側につける。フマエは鯉釣りに必要な設備である。オハマイデの時は神興一体を二〇人くらいが担ぎ、神興同志ブツケ合って喧嘩がつきものであった。神興がそじるがキョウシャワリ（郷社割り？祭典費）で補修する。神興はオタミセで一晩お泊まりになる。徹夜で神樂が奉納される。姪子大黒・柴引・湯立などの番付がある。湯立は神主は舞っていた。神樂の時に、神樂師が神主を抱いて海に投げ込んでいた。

四日に神興はオカエリになる。オタチの時にオタミセで餅を撒き、オミキを参詣者に振舞う。「チョウサイ、チョウサイ」と囃して神興が立つ。

三月五日 カバネという砂浜に祭壇を設け、神主がお祓いをあげてシオメ祭りをする。網方達の大漁祈願である。カバネ祭りという。余興として必ず相撲があった。飛入り勝手に焼酎や手拭いが賞品とされた。

三月二日 お大師さんである。お大師山に八八か所の札所がある。お接待は小豆飯の三角形の握り飯やせんべいである。札所の持主が本堂に供えてから、各自の札所で参詣者に配る。大勢の人が弁当ごしらえでお大師参りをしてお山をまわったり、高山の浜に行ったりして、終日遊ぶ。

四月四日 アラタメが終ったのを祝ってカキアイ（混ぜご飯）を飲むのがしきたりである。宗門改めの名残りだという説が

ある。徴兵の予備改めだという説もある。一日のアラハナの時もカキアイを飲むが、アラハナをアラタメに延期していたので、カキアイを一回食べそこなつたとこぼしていた。

四月八日 お釈迦様。東光寺に釈迦堂を仮設し、たらいのようなものに釈迦像を安置する。大きな鍋で甘茶をドンガラわかす。参詣者は小さな瓶に甘茶をもらう。甘茶で墨をすって書くとお上手になるという。

五月五日 「幟祝い」（人の一生参照）。蓬と茅の束を屋根に上げ、菖蒲湯をたてる。かんぴんの口に菖蒲を挿した菖蒲酒を神にホカッて、いただく。

五月八日 「お薬師様」。大般若経があがって、寺総代・伍長・網方などの顔役は寺に招かれて一杯出る。正・五・九月のお薬師には、家々では必ず半麦の米飯にケンチャンを炊く。

五月二十三日 「三夜」で、ゴロシロ餅を作り、米を入れたささげ飯を炊く。

六月十五日 王子神社の夏祭りで、お神楽が奉納される。家庭では半麦飯にサイを煮る。

六月二十九日 オンパライである。海で泳ぐ。泳げない者は潮を汲んで浴びる。西野浦部落では盛大である。

### (3) 盆

七月七日 六日にタナバタを作る。短冊には「七夕様が棚から落ちて胡瓜の船に乗って行くらん」と書く。門口に立てる。

七日の早朝に海に流す。「七日盆」といって、晩にそうめんを食べる。寺が灯笼柱を立てる。経文を書いた幡がつけてある。盆の間中立てておく。尖端の杉葉が枯れば盆だと子供が盆を期待している。七日から墓掃除に行く。家毎に浜の新しい砂を運んで墓地に敷く。シキビ（檜）を挿しかえる。墓地の手入れは平常も行き届き、きれいな砂が敷かれ、草は生えてなく、常に新しいシキビがあがっている。

七月一三日 網船をタデ、手入れをして浜に上げる。仏壇に果物・菓子・芋のハツオ（初穂）、そうめんを供える。仏壇の前に長円形の盆棚を作る。三本ずつの笹を組み、三段に笹を横に渡す。上段の笹に灯笼菓子・フズキ（ほうずき）・梨・とう

もろこし・五穀を吊す。五穀は穂ナリ(のまゝ)である。中・下段はシヨロ様の踏み台だという。軒下に一〜二この盆灯籠を下げる。青年団が寺の下の広場に踊りの櫓を組む。盆踊りは二本踊り(扇子)・一本踊り(団扇)があり、伊勢音頭・熊野節を踊る。

七月一四日 シヨロ様が帰るのは午前三〜四時頃である。主人は早く起きて表の雨戸をあけ、軒下の盆灯籠に灯りを入れて迎える。仏壇にろうそく・線香を立てる。一日中、精進料理である。墓参りは午後五時以後である。家族全員が盛装して行く。線香を立て、灯籠(今はカンテラ)を上げ、ミズノハナを砂の上に撒く。ミズノハナは五穀で、何でも五品揃えばよいという。主な親類の墓にも参る。夜食にそうめんを食べる。この日から一六日まで盆踊りがある。今は二日間だけである。

七月一五日 朝食は精進料理、昼食に「精進上げ」をする。晩は刺身、小豆飯・ぜんざいを炊いて祝う。初盆の家や主な親類に「盆歩き」に行つて、仏壇に参る。午後六時頃、墓に参る。灯籠をともし、持参した松明を墓地の隅で送り火として焚く。七月一六日 夜明けに「精霊送り」をする。飯・おみやげ団子を作り、リヨウグの膳を供える。リヨウグの膳は小さな木製の高膳で、一式揃っている。盆棚をはずし、分棚とリヨウグの膳の供え物を里芋の葉に包んで海に流す。盆棚の横笹を精霊様の杖という。

昼からボケ網の準備にかかる。一七日から一斉に出漁する。他の日には獲れなくとも、一七日は必ず漁があるといわれた。七月一七日 寺の「精霊流し」がある。一米くらいの藁船を作つてカバネの浜で流す。

七月一八日 「観音様」。主に女が観音山に参る。早い人は午前零時を過ぎれば参る。寺で読経がある。正月にも観音様がある。

#### (4) 秋から冬

八月一〇日 「八月祭り」といって、エベスの祭りである。カギョウドメで漁に出ない。網方はボケ網船を化粧して、船の中で酒宴を開く。ヒロ盆にオサイを盛つて肴にする。三味・太鼓で賑かである。暑いので船にカバーを張り、ごさを敷く。八

月祭りにマルズシは欠かせない。

八月十五日 「名月」である。芋を掘って神仏にホカウ。この晩に限って、農作物なら何処のを盗んでもよい。芋・砂糖黍・密柑・大根・ねぎなどを盗むが、大盤には盗まない。若いシが盗んだ物を宿で料理して食べる。

九月八日 「薬師様」

九月九日 「継子の節供」という。栗を入れた芋飯を炊く。「九月九日かヨ、腹太よ。わしの腹でも太鼓腹」という。

九月十六日 「伊勢講」 半麦飯にオサイ程度の小祭りをする。

九月二十三日 「三夜」 裸麦・粟の粉に小麦粉を混ぜて蒸し、搗いて餅にする。米の餅も少しは搗く。餅を神仏にホカウ。小祭りである。

一〇月一〇日 「金毘羅祭り」 ボケ網船に旗を立てて沖に出る。船上で、刺身で一杯飲む。白ご飯を食べる。

亥の子 一月初の亥の日に「亥の子」を祝う。米・麦・粟などで餅を搗く。青年や子供がそれぞれ数人で組んで亥の子を搗く。石を藁スボを包んで縄をつけ、二人で縄飛びの縄のようにまわしながら門口で搗く。重いので石のかわりに木を入れたりした。「亥の子、亥の子、亥の亥の祝うた者は、正月見れば松島かざる。四方の隅にすし立て並べ、此処のかみさん何時来て見ても、酉禱で金はかる。一つ祝いナンセ。スットンントントン」と囃す。最後のトンに力を入れて納める。餅を三〜七こくれる。餅はシイデに入れる。餅をくれない時は「亥の子餅くれんウチャ、鬼生め、蛇生め、角ン生えた子生め。ヒンフンミー、ヘー」と悪たれた。

十一月十五日 王子神社の「霜月祭り」である。神社で神事がある。各戸では餅を搗く。米七・麦三の米飯を炊き、オサイを煮る。

十二月一日 「ナラビの朔日」といって、米の量を増した晩ご飯を炊く。

十二月二十五日 東光寺の餅搗きである。主な壇家に餡餅五こくらい配る。

## 牡丹長者

国は奥州常陸の国の、牡丹長者のゆわれを聞けば、家は三階八つ棟造り、八つ棟をも上げたる長者。四方八方金そうの幕、裏は泉水築山築かせ、金魚銀魚や鯉鮒生かす。これを御屋から和子三人と、眺め暮すも長者の威勢。此度三人嫁迎え来る。先は兄嫁生まれを聞けば、夕日長者の姉姫さんが、牡丹長者の兄嫁に来る。次に中嫁ゆわれを聞けば、朝日長者の乙姫さんが、牡丹長者の中嫁になる。末の三男乙嫁さんは、元は大内公卿さん育ち、一一后のあるその中で、一の後の南天の間で、少しおん身に子細がござる。花のご殿をおすべりなさる。空ろ舟にて身は島流し、空ろ舟をば何の木で造る。木をば改め縦・横・櫻・紫壇・黒檀・唐木を混ぜて、舟の長さが一丈二尺、横の広さが一丈四尺。縦も横をもなれおた舟よ。空ろ舟なら夜昼知れぬ。夜と昼との界のために、中にビードロ透かしを入れて、これも大内情けのためよ。しよてつ団子やこくどの菓子よ。一つ食べれば三日と三夜、二つ食べれば七日の食よ。鳥も通わぬ遠州灘よ、これが最後と突き流される。こゝに三日やおそこに五日、流れ流れて三年三月、流れ着いたが常陸の国の、九九浦の島大将の、島の大夫に身は拾われて、その大夫は賢い人で、波にかたどり名は百合姫と、これが長者の乙嫁になる。なれど乙嫁長者の気入り、寝ては乙嫁覚めてはそばに、お寝間のお伽も百合姫と、お寝間さずけて終日送る。それを嫉んで中嫁さんが、奥の一間に兄嫁呼んで、なんでお姉さんどう思わんす、あれな乙嫁あゝしておけば、私と貴女は水仕事にかげる。僅か大夫の拾い子なれば、手物縫い物知りやすまい、手物競べて落そじゃないか、言えは兄嫁うち喜んで、奥の一間に乙嫁呼んで、申しこれいな乙嫁さんよ、いつも正月一日は、一に長琴二にそろばんの、三に女の縫い物競べ、ヤレ大福様の帳祝い、これにお家は縫い物競べ、さあさ縫わんせ乙嫁さんよ、言えは乙嫁さて申すには、たかが大夫の拾い子なれば、手物縫い物よく知りませぬ、言えは中嫁おとしもつけず、貴女長者の気に入り嫁よ、手物縫針知らぬで済むか、さあさ縫わんせ乙嫁さんよ、言えは乙嫁涙で語る、何を言わんす姉さん方よ、向う遙かな小谷の水も、ヤレ下から上に流れやせぬ、上から下にと流れます、貴女方が縫い下りたら、知らぬながらもこの乙嫁も、縫うてみ



せます一針なりと、言えは兄嫁うち喜んで、奥の千疊に早や駈け上り、金の屏風を立てまわし、綾と錦の白地をはえて、ヤレこくどの針が二五本、裏のまち針七五本、それに五色の糸さしとめて、さあさ縫わんせ兄嫁さんよ、言えは兄嫁うち喜んで、ヤレ兄嫁さんのお針立て、左片袖袂にかけて、獅子に牡丹にいよ竹に虎、二四孝の筭掘りや、裾に下りてその針止めは、ヤレ松川美女で針を止め、床のおん間にお飾りなさる。さあさ縫わんせ中嫁さんよ、言えは中嫁うち喜んで、ヤレ中嫁さんのお針立ち、右の片袖袂にかけて、四国讃岐の屋島の磯で、源氏平家のおん戦いよ、那須の与一が弓引く姿、出船入船また張船を、これを細かく縫い付けなさる。裾に下りてその針止めて、ヤレ浜松千鳥で針を止め、床のおん間にお飾りなさる、さあさ縫わんせ乙嫁さんよ、言えは乙嫁にっこ笑い、ヤレ乙嫁さんの針立ちは、左の片袖袂にかけて、ヤレ勿体なくもお日お月、伊勢で天照皇大神宮様、天の岩戸にお隠れなさる、それでこの世が暗闇となる、六〇余州の神々寄りて、天の岩戸をお開きなさる。此の世ばかりかあの世のことも、ヤレ二つや三つや四つ五つ、一〇より下の幼児が、賽の河原で塔築く、ヤレ鬼ほど邪険な者はない、築いた岸をも早や引きくずす、裾に下りてその針止めは、賽の河原の地藏で止めて、床のおん間にお飾りなさる、長者両親見なさる、獅子や牡丹は要らざるものよ、軍学長者に不吉なものよ、ヤレ勿体なくもお日お月、長者末代おん宝物、手縫い競べでこう負けました、衣裳競べでおとしたなれば、島の大夫に追返しゃんせ、言えは兄嫁うち喜んで、篋筒長持一二棹出し、綾と錦の衣裳を取出す。ヤレ中嫁劣らず一二棹、さあさ出しゃんせ乙嫁さんよ、言えは乙嫁からりと笑い、綾や錦が衣裳の中か、四寸四方の箱取り出し、一二一重の緋の袴着て、下れ下れと頭が下る、許す許すと頭が上がる、衣裳競べでまた負けました、これじゃかなわぬ琵琶弾じ、言えは乙嫁にっこ笑い、琵琶の因縁知らねば教よ、一の糸からこの糸弾じ、三の糸までお下りなさる、言うて残したエイヤコノサンサ。

### 賽の川原

ソレ世の中に定め難きは無情の嵐、散りて先立つ習いと見えど、まして哀れは冥土と娑婆よ、賽の川原にとどめたり。ヤレ

二つ三つや四つ五つ、一〇より下の幼児が、朝の日の出に手を取りて、人も通わぬ野原に出でて、山の大将は我一人かな、言うもあり又片ほとりには、土を運んで上りつ下りつ、石を運んで塔築ぐ塔は、一丈築いでは父のため、父のご恩と申せしものは、ヤレ須弥山よりも高くして、言葉にどこか述べ難し、二丈築いではそれ母のため、母のご恩と申せしものは、ヤレ患の恩の深いこと、蒼海よりも深いぞえ、何れ仲良く遊びはすれど、日暮れ方には物淋しさに、乳をたずねて乳母来いと呼ぶ、声は木霊にひびき立つ、恋し忍びて淡きと言えど、やくの塔をも築ことすれば、何を遊ぶや子供や子供、かね照る日まなこの光、何処ともなく失せにけり、かかる難きその折伏しに、地藏菩薩が現われ給い、此処に來いとて衣の神を、かがし給えば皆取りついて、すかし給えばおこたら顔よ、顔をさすりつ髪撫で下ぐる。地藏菩薩に取りつき難く。世に涙のおんひまよりも、何処へ母さんなぜござらぬか、我に預けしよりも当娑婆にて帰りを待つぞ、さりながら罪は我人ある習わしじゃが、殊に子供のその罪科は、母の胎内一〇月が間、苦痛さまざまこの世に生まれ、四年五年また七つ年、なるやならいで今帰えるゆえ、賽の川原に迷い来る、父はなくなり母見えす、我に頼めどかなわぬ浮世、竹の切り口エイヤコノサンサ。

## 大和三太

島の始まり淡路が島よ、国の始まり大和の国よ、大和国では山崎三太、さても三太が生まれを聞けば、父は朝日を名乗りし長者、母は京都の禁裏の内の、氏も糸凶も歴々なるが、なれど朝日に子のない故に、国は関東下野国、日光山にと祈誓をかけて、申し下した三太でござる、されど三太は哀れな者よ、幼な時には父上おくる、明けて子の年火難に遭うて、家も糸凶もみな焼き捨てて、後に残るは据え石ばかり、母を一人育みかねて、親がならねば堺屋様に、小判四〇両に身を売り沈め、寒の師走も陽の六月も、雨の降る日も又雪の日も、駒の手綱で月日を送る、なれど三太は馬子唄上手、三太馬子唄地は法華経の、八の巻をもくずしに歌う、三太馬子唄歌いし時は、天は宇宙の地は奈落まで、地獄世界の餓鬼道のものも、浮び上りて苦げんを逃れ、山で歌えば木萱が靡く、川で歌えば鳴る瀬も止まる、空を飛び来る鳥燕さえ、羽がい休めて聞くよな歌よ、ヤレ滝から

落ちる水でさえ、鳴りを静めて聞くよな歌よ、明日は伏見の駄賃屋様の京につき出す駄賃の荷物、綾が七丸錦が八丸、晒木綿が三〇五反、数多友達打ち連れだちて、駒は三才三太は一九、駒も三太も血気の盛り、駒が鈴振りや三太が歌う、京都伏見は三里の通い、三里間を唄でやる。こゝに伏見の代官様に、壬生の判官家房公の、一人娘に玉代の如と、頼もるお年が一六才で、物によくたどえていえば、きりよう吉野の桜木育ち、立てば芍薬坐れば牡丹、顔の牡丹に朝日をうけて、朝日輝く玉代の如が、しょくにもたれて格子の内で、書いつ読んでの手習いなさる、そこを三太が歌うて通る、三太その日は歌いし唄は、坂は照る照る鈴鹿は曇る、あいの土山雨が降る、それを姫君さて聞かれしも、さても綺麗な馬子唄なるか、あれが大和の三太であるか、声のよいほどきりようもよかる、きりようよいほど姿もよかる、姿よいほど心もよかる、心よいほど万事がよかる、一目見たいは大和の三太、なれど家高武士の娘なれば、門を駈け出て見ることならぬ、ただ格子の内でも聞くばかり、もはや馬子唄かすかに聞こえ、遂に姫君恋路となりて、恋がつりて病となれば、姫が両親それとは知らず、伏見町なるお医者呼んで、医者よ薬と手を尽せども、姫の病気はかききはない、親は煩惱子の可愛いさに、東三〇先き三か国、西は三〇とまた三か国、大社大社に祈誓をかけて、ヤレ高野山では護摩を焚き、お伊勢様では太々神楽、星の祭りも致してみたが、姫が病気は次第に重る、も早や姫君最後を急ぐ、下女も下男も両親様も、次のおん間にお控えなさる、後に姫君お一人残る、少しばかりの書置せんと、重き沈を漸く上げて、覗引き寄せ墨すりながし、鹿の巻筆こすきの紙に、まず一番の筆立ては、許し給うや両親様よ、一〇と六才今は今でも、いかにお世話に相成りました、私がこれこの病気とて、身から起きたる病にあらず、気からもちくる病でござる、大和三太におしや焦れ死に、わしが死んだるその亡き後は、千普万普の経文よりも、大和三太をこの家と呼んで、位牌前にて香花とらせ、説教なりな馬子唄なりと、手向け給えや両親様よ、京都街道の新松原に、姫がお墓を築かし給え、末の書置さらばと書いて、灯る灯明の消え行く如く、遂に姫君おん果てなさる、一家一門皆うち寄りて、歎く半ばに書置見出す、さても姫君不良な最後、たとえいやしい駒追いじゃとて、末は目出たく添わしてやるに、何をいうにも皆あごととよ、野辺の送りの支度をせんと、伏見町なる大工を寄せて、切りつ刻んず棺ごしらえよ、ヤレ天幕地幕四方幕、四方幕には燕を立てて、啼や

天蓋龍巻きまでも、なにかに揃え哀れな送り、ヤレ新松原には送りつけ、日なじ経つのは間のないものよ、姫が七日の茶立ちの供養、三太それとは夢にも知らず、駒が鈴振りや三太が歌う、竹に雀は品よく止る、止めて止まらぬ色の道、姫が両親来て聞くよりも、さてもきれいな馬子唄なるか、彼が大和の三太であれば、姫が焦がれて死んだも道理、彼をこの家に呼べとの御意に、ハッと答えて家来の者は、門を駈け出て両手を上げて、申しきれいな駒追いさんよ、そなた大和の三太でないか、三太殿ならお屋敷よりも、御用がござんす一寸寄りなされ、言えば三太が踏み止まりて、さて少時より駒追いすれど、伏見町なる代官様に、身には覚えて無礼はせぬが、ご用とあるなら寄らねばならぬ、門の柱に駒つなぎおき、ご免ご免と入り来る三太、玄関口にて両手を突いて、ご用は如何にと伺いければ、三太殿とはお前がことか、そなた呼んだは余の儀でないが、わしが娘に玉代の姫と、お前歌いしかの馬子唄が、耳に止まりて恋路となりて、恋がつのりて病となりて、死んだ姫には書置ござる、私死んだるその亡き後は、大和三太をこの家と呼んで、千普万普の経文よりも、位牌前にて香花をとらせ、説教なとな馬子唄なりと、手向け給えや両親様よ、言えば三太が親切人で、脚絆・前掛・草鞋を脱いで、裏にまわりて行水なさる、足もさわらぬ金欄べりの、奥の千疊の位牌に参る、位牌前にて香花盛りて、説教三節に馬子唄三節、唱え終りて下座に下り、暇申して帰るとすれば、姫が両親それみるよりも、今度ならねば又とやの時、駒が蹴上げた泥水なりと、心あるなら手向けて給え、京都街道の新松原に、姫が墓所がござんすほどに、言えば三太が親切人で、駒の手綱が百八煩惱、殊数爪操りて花籠持って、お墓参りも殊勝なもの、お墓前にて香花盛りて、読経三節に馬子唄三節、唱え給うて思案をなさる、身にも覚えぬ空恋故に、焦れ死んだる姫君なれば、死んだ顔なり眺めんものと、立てた卒塔婆を早や引き倒す、積んだ岸をば早や引き崩す、一つ掘りては南無阿弥陀仏、二つ掘りては説教唱え、三歎四歎と早や掘りついて、ヤレ開けずが箱とは申せ、許し給えや天道様よ、四方棺をも開いて見れば、死んだ姫君身はしょんぼりと、死んだ顔さえこうあるものを、生きて伏見に在りますなれば、伏見町には並びはないと、言うて三太が涙を流す、こぼす涙が姫君様の、たった一玉口中に入れば、姫がためには気付けとなりて、あただただの大熱がさす、心静に両眼開く、棺の中にはすつくと立ち上る、如何な三太の落着き人も、後に退き興ざめ顔よ、そなた

迷いか狐の業か、迷いでもない狐ではない、お前歌いしかの馬子唄が、耳に止まりて六道の辻で、道に迷うてよみ返えり、あゝりや浮世がこうなるからは、連れて他国をまわろうなりと、又は大和に帰ろうなりと、お前次第に身を任せます、たとえ塩焼く火焼きとしても、恥かしゅぐざらぬござらぬ三太殿、言えば三太がさて申すには、伏見町なる両親様が、荒い風にも吹かせぬように、蝶よ花よと育てしものを、旅の空とは苦勞がござる、何はともあれ両親様に、連れて帰りておん目にかけん、二人連れ立ち墓所を下る、急ぎ急いで我が家に帰る、うちは七日が茶立ての供養、供養半ばに二人は帰る、姫は上りて冥土の話、三太その日の委細を語る、姫が両親それ見るよりも、晷三枚下座に下り、貴方知識か氏神様か、姫がためには命のお主、何処もやらんぞのう三太殿、直に仏事を祝いに直す、一の座敷をどうじゃと聞けば、三太一九の元服祝い、二なる祝いを何じやと聞けば、姫と三太の祝言祝い、三の祝いをもつぱら聞けば、壬生の判官家房公の、家も知行も相統祝い、四なる祝いをどうじやと聞けば、小判四〇兩馬にとつけて、身請金じやと堺屋様に、五なる祝いを何じやと聞けば、人夫仕立てて母親様を、馬やおかごとお迎えとる、親に孝行致せし人は、末は鶴亀エイヤコノサンサ。

#### お為・半蔵心中

洲に身を投げ刃で果つる、心中情死は世に多けれど、鉄砲腹とは剛気な最後、所何処よと尋ねて聞けば、国は豊州海部の郡、佐伯領土じや堅田の谷よ、堅田谷では鶴山が名所、名所ならこそお医者もござる、医者その名は元了国手、仁の術意の光はそれで、あかる行灯のその灯し火に、午夜の嵐がさらと吹きすさぶ、消ゆる思いが一家に聞こゆ、家の世嗣に半蔵というて、幼立ちから利発な生まれ、学ぶ医学の修業は積みて、匙も良く効くみてもあたる、堅田在郷のご城下までも、しつく病は半蔵にかかる、半蔵は長袖常にもしされて、襟を着重ね小褌を揃え、足にや白足袋八つ緒の雪駄、しゃなりしゃなりで浮世を渡る、扮す姿は人目に立ちて、道の行き来にや皆立ち止まる、彼は良い者良い若い者、在にや稀じやと賞めては通る、賞める言葉がつい身の仇よ、同じ流れの川下村で、潮の満干をみる相江の、渡り下りに修験がござる、修験その名は竜正院と、竜正院とぞ呼ぶ山

伏の、妹娘におためというて、今年一八角前髪の花もはじろうきれいな生まれ、諸芸縫針読み書きまでも、あたり界わい誰たてつかぬ、地下に一人の評判娘、それに半蔵が想いをかけて、いつか何処ぞと恋路の願ひ、胸に燦く火の燃えてはいれど、人目ある世はままにはならず、ままの浮橋渡りは絶えて、磯の鮑でただ片想ひ、思い詰めたる心の祈念、どうぞおために逢わして給え、逢うて想いを遂げさすならば、一生断ちます無益の殺生、神や仏も至誠をこめて、祈る願ひを哀れとおぼし、感応あらさせ給ひし甲斐か、頃は正月二八日は、村の鎮守の竜王様の、年に一度の初ご縁日、老いも若きも参詣すれば、おため・半蔵も氏子で参る、登る半蔵に下向するおため、一の鳥居の左の脇で、ひよいと半蔵はおたために出逢ひ、積もる想ひに人目もさけず、しかと手を取り顔うちまもり、申しこれいなこれおためさん、私は真実お前がことを、寝ては夢見起きては想ひ、思い暮らして照る日も曇り、冴えた月夜もつうばたまの、闇に迷いて三度の食も、胸に詰まればついしゃくの種、しゃくが病の手引きとなりて、かくもやせたは皆誰故ぞ、哀れ一夜の慈悲情けをば、掛けて下されのうおためさん、いえばおためがさて申すには、物の数にも足らわぬ私、誠真実それほどまでに、言うてくれるは嬉しいけれど、推量なされて半蔵様よ、わたしや今では継母がかり、親がきつかりや身は龍の鳥、籠の鳥なら身はまならず、外のご用ならどうでもなるが、恋路ばかりはお許しなされ、言うに半蔵は気もせきあげて、こうも心の底うちあけて、堪えぬ思いに告げたるものを、人の親切仇にはうけて、情けめきたく返事のつらさ、物のたとえもひくではないか、深山かくれに春咲く桜、なんぼ色良く咲いたるとても、人が通わにや盛りは知れぬ、盛り過ぎれば風吹き散らす、岩のはさまのつつじや椿、誰も手折らにやそのまま朽ちる、こころ辺りの川端柳、嫌な風でも吹きくりやなびく、末も試しは篠竹藪の、今年生えたる若竹さえも、止まる雀に宿貸す習ひ、魚は瀬に住む鳥や木の枝に、人は情のその下に住む、私やお前の寝る部屋に住む、どうでござんすのうおためさん、言えばおためがさて申すには、申しこれいな半蔵さんよ、そなたそれほど真実あらば、一夜一夜なる契りは嫌よ、二世三世もその先の世も、変るまいとの誓約しよう、当座ばかりに眺むる花と、仇な浮名を世に立てられて、添いもし遂げぬ語らいなれば、なまじ約束せぬのがましよ、言え半蔵がうち喜んで、あわれ竜王大権現様、八幡菩薩もご照覧あれ、つごう言葉に偽りあらば、半蔵一命差上げ

ましよう、神に誓いし心の誠、みえておためもにっこと笑い、しめて交わせし手と手のうちよ、こもる互いの想いも通い、この日別れておためは帰る、半蔵それよりお滝に上がる、お滝上がりて氏神様に、日頃月頃焦がれし人に、逢うて互いに言葉を交わし、交わす言葉に真実こめて、積もる想いも高根の雪と、溶けて嬉しき心の願い、これも貴方のご利益なるか、二人約束した日も同じ、年に一度の初ご縁日、お礼参りは重ねてし、暫し願いし心の祈念、述べて拜んでわが家に帰る、半蔵それよりおためが許に、三月四月は忍んで通う、忍ぶ恋路にや難所がござる、義理のしがらみ人目の関所、関所守る目許さぬものは、恋の関路に身をまぎらせて、うわべ世間を忍ぶといえど、忍びや忍ぶほど浮名は立ちて、宵に吹く風朝吹く嵐、広い堅田を早や吹きまわす、そこから界わい東に西に、何処の村でも三人寄れば、噂話はおために半蔵、在所収納時表かつ囃子、流行り小唄がおために半蔵、半蔵両親それとは知らず、隣近所の爺婆達が、何時も小声でささやく話、よもやそれとは心もつかず、世間話のたゞよそごとと、仇に通せし身の恥かしや、聞けばわが子の半蔵がことよ、聞いて両親うち驚きて、わが子半蔵に意見をせんと、奥の一間に半蔵を呼んで、半蔵よう聞け大事なことよ、そなた大事な身を持ちながら、何時の頃から心の迷い、人目忍んで柏江村の、渡りばたなる修験の許の、あれが娘のおためを慕い、末は夫婦となる約束を、固く結んで通わるそうな、家の跡目を継がせるそなた、そなた心に叶うた娘、入れて夫婦にしてやりたいは、親の心に山々なれど、家が大事か女が主か、筋目正しきわが家の系図、やがて二代の元了様と、人に賞められ世に立てられて、家を継ぐべきそなたでないか、広い世間の例を見るに、何処の里でも貰うた嫁の、心一つで一家は栄え、心一つで一家は滅ぶ。みめやきりょうに迷いし人の、家をおさめた例を聞かず、殊にそなたは修験の娘、医者と山伏家にも不吉、添うに添われぬ悪縁なれば、ここの道理をよく聞き分けて、どうぞおためと別れてたもや、そなた一生添わせる妻と、かねて見立てて定めし者は、灘の鳥越従姉妹のおしげ、今年一〇月引越す筈よ、あれと仲良く夫婦となりて、家の栄えを計りて給え、詫びつ口説きつ涙を流し、慈悲も情もこめたる母が、ことを分けたる親身の意見、聞いて半蔵は胸とどろかせ、何と答えん言葉は絶えて、腹に据えたるわが身の覚悟、好かぬおしげと夫婦となりて、嫌な一生暮らそうよりも、いつそ死んだがわが身のためと、心決して母上様に、申しこれないな母上様よ、こと

を分けたるそのご意見に、厚きご慈悲の光を受けて、胸の迷いの雲晴れました、父母の仰せに従いまして、すぐにおためと手を切りましょう、述べる半蔵が心の内は、今宵一夜がわが身の限り、又と逢われぬこの世の親に、嫌な言葉を叫かそうよりも、安堵さすのがいまわの孝と、口の先なるその気休めに、母はそれとは夢にも知らず、半蔵良い子よく諦めた、幼な時より利巧な者と、人も賞めたる甲斐こそあると、家の大事を心に掛けて、あかぬ女に未練もかけず、それでわが家の跡取り息子、父もさぞかし喜びましょう、言うていそいそ一間を出でる、後で半蔵は腕こまぬいて、炎も暗き火桶に向い、一人つくづくわが身の果てを、味気なき世を心にかこち、死ぬと心をきわむる上は、今宵一夜もうるさき娑婆よ、息のあるうちおために逢うて、様子聞かさに不実な人と、後でおためが怨むであろう、怨むおためを得心させて、自殺すること男の誠、そうじゃそうじゃとわが家を出づる、急ぎや程なく柏江村の、まだも急げばおためが許よ、着いて何時もの裏にとまわり、家の窓から様子を見れば、おため朋輩皆うち寄りて、流行り小唄で夜なべの最中、おためおためと小声で呼べば、おため不審の眉うちよせて、いつも早いに今宵は遅い、見ればお顔の色さえ冴えず、何か子細の有りそなものよ、訳を聞かせて半蔵様と、言えば半蔵吐息をついて、胸をうちくる勦棒を押え、常に冴えないその色さえも、沈み勝ちにておために向い、月に村雲花には嵐、障あるのが浮世の習い、私とお前の二人の仲は、世にも人にも知られじものを、包む甲斐なく仇名は洩れて、親の折檻一家の騒、生きて此の世に居られぬ半蔵、死ぬと覚悟を決めたる上は、せめて一度お前に逢うて、長の別れの暇を告ぎよと、わが家抜け出し今来た私、私は冥土に行きます程に、お前や此の世に生き長らえて、人に優れたよい聲迎え、夫婦仲良く暮して給え、同じ流れの汲み出てさえも、深き縁のあるぞと聞けば、茶とう茶水のご回向願む、言えばおためがせきくる胸に、泣く音立てじと袖かみしめて、耐えぬ思に身を震わせて、何の答えもたゞ泣くばかり、しゃくり上げたる涙の雨に、濡れぬ海菜が色ます風情、ようよう袂で顔おし拭い、余り無体な半蔵様よ、貴方日頃にどうおっしゃった、今の言葉はありや水臭い、そもや二人がこうなる始め、神を誓に互いの誠、告げて二世まで夫婦になると、言うた言葉を忘れてかいな、生きて此の世で添わぬなれば、共に死ぬと兼ねての覚悟、起誓香紙の百枚よりも、言うた言葉をわしや反故にせぬ、貴方死ぬのを傍から眺め、後に残りにて聲取るよ



うな、そんなおためと申うてかいな、二世も三世もその先までも、添うて変らぬ一人の夫と、申うそなたを世に先立てて、たゞの一日もなに長らえよう、貴方冥土に旅立つなれば、わしも彼の世のお供をしましよ、言えは半蔵うち喜んで、暫し涙の袂を絞る、されば死ぬ日を決めねばならぬ、死ぬるその日は六月一〇日、堅く誓つて半蔵は帰る、日なち立つのは間のないものよ、今日はその日の六月一〇日、おため朝から髪解き直し、化粧済ませて晴着に着換え、父と母とに両手をついて、申しこれいな父上様よ、私や浪越の観音様へ、かねて込めたる心願あれば、今日はこれから参詣しましよ、言えは両親言葉を揃え、そなた浪越に参るはよいが、土用半ばの炎天なれば、傘をさしても日中は暑い、暑いうちにや木陰に休み、咽喉が乾くとも冷水飲むな、水を飲むときや薬をやるよと、父はたんすの抽出あけて、出して与える富山の氣付、おため両手に押しただいて、胸にせきくる涙を押え、今日の一日を最後になして、明日は此の世に亡きわが子とも、知らぬ真実の父上様の、深き情のそのお心に、背く不幸は因果か業か、今宵山路の草葉の露と、消えし知らせを聞きやるならば、さぞやお恨みなさるであると、思いまわせば空恐ろしく、膝も震えて暫しが程は、立つも立たれずその座に居たが、おためようよう氣を取り直し、それじゃ父上参りて来ましよ、申うておためはわが家を出づる。長き日足も早や傾きて、とかくするうちその日も暮れる、こゝに半蔵はわが家に在りて、今宵限りの身の上なれど、後に一筆書置きせんと、部屋に籠りて机に向い、硯引き寄せ墨すり流し、筆の始めに記せしことは、二二才を一期となして、親に先立つ不幸の託を、次に記せしそのまたことは、受けしご恩は千尋の海も、須弥の高根も及ばぬものを、露や塵ほど報いぬ上に、勝手気まゝな最後を遂ぐる、不幸いや増す不埒の託を、次へ次へと身の非を責めて、父母に詫びたるいまはの手紙、書いて封じて手箱に納め、葛籠開いて衣裳を出だす、半蔵その日の死装束は、肌白むく白地の下着、上に越後の白帷子を、つけて締めたる博多の帯に、袂む印籠も白金黄金、やがて支度も皆整え、鉢子盃袂に入れて、家に伝わる頼国俊の、一刀たばさみ鉄砲下げて、馴れしわが家をひそかに出づる、急ぎや程なく柏江村の、勝手知つたるおためが許よ、格子窓から覗いて見れば、一人おためはたゞしんぼりと、目には涙の物案じ顔、おためおためと小声で呼べば、おため駈け出て半蔵にすがり、お出で遅しとわしや待ち兼ねた、こゝで人目にかかりましたら、どんな障もで

きよも知らぬ、尽きぬ話は行たその先と、二人や連れ立ち家路を離れ、行く手急げばはかどる道の、後をうずむる川もやさえも、消え行く身のつれづれの友、岸を離れて江頭に来れば、今宵一〇日の月しろさえも、西の尾の上に早や傾いて、ヤレ暗さも暗し渡田の、此処を通ればつい思い出す、過ぎし五月の田植えの頃は、村の娘ご皆うち連れて、茜纏のいと華かに、菅の小笠のその一揃い、くけし深紅の紐引締め、緑の早苗かかえのうおび、濡れて植えたるその稲さえも、秋は捻りて穂を早やかざし、誰を想いにあのやせ腰の、末は世に出てままにはなるが、同じ月日のその下に住む、わしとお前はなぜ何処に、ヤレ育ちもやらぬしいら穂の、稔もせいで果つるかな、言えば半蔵も声うち湿り、言うて帰らぬ皆あだごとに、何を悔みて啼く時鳥、啼いて飛び行く声聞けおため、死出の田長が冥土の旅の、道を教えて先立つものよ、声をしおりのあの山こそは、人の名に呼ぶ城山峠、今宵一人が死山峠、さあさ急ごと気を励まして、山の峠に二人は上がり、此処が良かると草折敷いて、銚子盃早や取出だし、半蔵傾けおためにまわす、暫し名残りの酒汲み交す、これが此の世の限りと思や、さすがおためは女の情に涙押えて半蔵に向かい、こんなはかない二人が最後、遂げうと知らせの正夢なるか、正月二日のあの初夢に、私の挿したることのかんざしが、抜けてお前のその脇腹に、しかと立ちたる夢をもみたが、夢が浮世か浮世が夢か、早く覚めたや無妙の眠り、言うて頼むは後世弥陀浄土、夏の短き夜も早や更けて、今鳴る鐘は江国寺、また鳴る鐘は常楽寺、またも鳴るのはアリヤ天徳寺、凡て五か寺の鐘鳴りひびき、白む東の横雲の間に、夜明け鳥が最後をせがむ、死なにや追手がかかるも知れぬ、早よう殺して給えや、言うに半蔵は気を励まされ、二尺一寸すらりと抜いて、花のおためをただ一打ちに、倒れるかばねに腰うちかけて、かねて用意の筒取り直し、ドンと放すがこの世の別れ、残る哀れは堅田の谷よ、今も留まる比翼の塚に、絶えぬ手向けの線香一朵、町の若い衆花嫁御達よ、色けもするなら浅きにざっと、あまり濃うすりや命にかかる、おため半蔵はエイヤコノサッサ。

戦没者供養踊り口説枕

一つ出しましよはばかりながら、何か一節口説いてみましよ、何を出そうか何口説こうか、何を出そにも何口説こにも、声

が出ませぬ蚊の声ほども、声の悪いは中のたがよ、節の悪いは師匠ないからよ、わしは蒲江の漁師の生まれ、音頭取るよな資格はないが、数多戦没勇士の為よ、過ぎし日清・日露の役や、満州事変やまた支那事変、殊に今度の大東亜戦は、世界各国その比類なき、大和魂をよく發揮して、世界戦史に輝く戦果、かかる戦果のそのまた裏に、いとも哀れな犠牲の有るを、忘れられぬと千代万代に、かゝる犠牲のその人々は家を振り捨てわが身を忘れ、父兄や兄弟妻子も捨て、君のおん為み國の為と、敵の弾雨の渦巻く中で、実に悲壮な最後を遂げて、ヤレ東京九段は増國に、安く鎮まる護國の神の、み霊を慰め奉らんもの、いつも七月一五日には、供養踊りを致しますので、町の若い衆青年衆よ、老いも若きも心をこめて、心からなる敬意を捧げ、囃し囃していさんと踊れ、今宵踊りを踊らぬ者は、君に不忠かまた英霊に、不敬極まる人非人とや踊れ踊れや最後まで踊れ、踊りや英霊のよい供養となる。

後記 この民俗調査は県教育委員会の依頼によって、昭和四六年三月二日から五日までの四日間に行なつたものである。調査が短期間であつたので、漁業・人の一生・年中行事の三項目を主として調査し、適宜の項目に分けて記した。話者は白岩杉松（明治二五年七月一日生まれ）・長田マチ（明治三十一年一〇月八日）・西元由雄（明治三八年二月一九日）の三氏である。三氏にはご多忙にもかかわらず、懇切なご教示を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。特に西元由雄氏には、収集された盆踊り口説など貴重な資料を提供されたばかりでなく、調査の順調な進行に終始ご尽力をいただき、誠に有難うございました。

（杵築高等学校・杵築市弓町）